

386
228



始



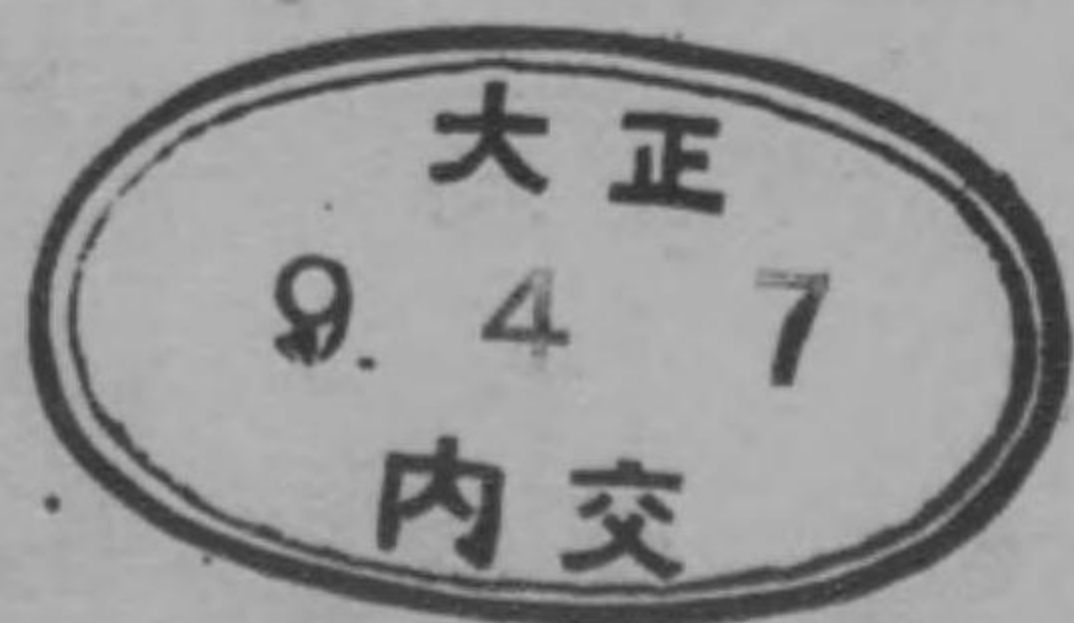
386-228



商五道德

著義重山杉

社北南



凡例

一、現今我國に於ける實業道德の不振は敢て一時の現象たるに止まらず、必ず其の深い根底に有力なる何物かが潜在して、之を然らしむるものなるを感じ、之を鑿索するに、世人が實業及び道德の二つに對して抱ける考の根本的に誤つて居ることが其の主なる原因なることを發見した。故に先づ其の源に溯つて此等の誤謬を正し、實業道德に關する眞の原理を闡明することを以て最も緊要の事なりと信じ、専らこの方針によつて此の書を編したのである。

一、次には此實業道德の原理原則を執つて之を現代に行はるゝ實業的行爲の或るものに適用して見たのであるが、前述の如く實業的行爲の一々に就て論ずることよりも寧ろ其の凡てを支配する根本的原理に就て述ぶることが著者の目的であるから、或は少く理屈に馳するが如き傾きあるを免れぬかも知れぬ。これは

本書本来の趣旨から起る己むを得ざる結果である。

一、書中に引用してある事例は成る丈け舊く無い事實を蒐むることに力のた積であるが、昨日の事も己に今日に於ては舊くなる世の中であるから、此の書の世に出る頃には著者が新しいと思ふて挙げた事も最早舊くなり、更により新しい事が幾多も起つて居るであらう。此等は亦た如何とも爲難きことである。

一、商工業道德に關する著書は外國に於ても餘り多からず、偶々其名を附する著書があつても、多くは唯だトラスト若くは關稅等二三の問題を取扱ふに過ぎぬ。況て我國に於ては此種の著書は殆ど指を屈するにも足らぬ程の有様なるを以て参考の資料に乏しく、有益なるサゼッションを得るの道の無かつたことを特に遺憾とする。大方の諸君示教を吝むこと勿んば獨り著者の幸のみでは無い。

大正九年一月

著者識

目次

- (一) 實業家及び實業的行爲……………一
- (二) 實業には道德は無いか……………四
- (三) 商工業に關する誤解……………六
- (四) 道德に關する誤解……………七
- (五) 何故商工業は賤まれたるか……………一〇
- (六) 往時我國に於ける商工業の状態……………三
- (七) 現今は何ふである……………四
- (八) 實業家未だ十分に自己の天職を自覺せず……………六
- (九) 人生に於ける商工業の効用……………七
- (十) 商工業は社會の進歩と共に其効用を増す……………二

| | | |
|------|---------------|----|
| (十一) | 智識の進歩と實業の墮落 | 三五 |
| (十二) | 此に倫理學の必要がある | 三八 |
| (十三) | 倫理學とは如何なるものぞ | 三〇 |
| (十四) | 倫理學の本領 | 三九 |
| (十五) | 二つの異つた倫理觀 | 四一 |
| (十六) | 快樂主義 | 四三 |
| (十七) | 嚴格主義 | 五〇 |
| (十八) | 自我實現說 | 五五 |
| (十九) | 如何にして自我を實現するか | 五九 |
| (二十) | 善 生 涯 | 六二 |
| (廿一) | 道德的生命は發展である | 六六 |
| (廿二) | 德 | 六八 |

| | | |
|------|-------------------|-----|
| (い) | 勇 | 七三 |
| (ろ) | 仁 | 八一 |
| (は) | 智 | 八三 |
| (廿三) | 實業的行爲は單に手段では無い | 八四 |
| (廿四) | 實業は戦争、實業家は戦士である | 九五 |
| (廿五) | 實業と戦争とは其目的が根本的に違ふ | 一〇〇 |
| (廿六) | 獨占と投機 | 一〇四 |
| (廿七) | 官權に依頼する弊 | 一三二 |
| (廿八) | 人の事業は天の信託である | 一三五 |
| (廿九) | 粗製濫造の弊を慎めよ | 一四二 |
| (三十) | 人眞似は實業家の本分では無い | 一四六 |
| (卅一) | 英國實業界の暗黒面 | 一四九 |

商工道德

一 實業家及び實業的行爲

余は是から實業道德即ち商工業に關する道德を論ずる積りであるが、其前に先づ陳べて置かねばならぬ事がある。他の事でも無いが、實業道德と言へば固より商工業を以て専門に其仕事として居る所謂實業家に關するものであることは勿論であるが、さればとて實業家なる者が他の人々と全く異つた別種の人間で無い限

- (卅二) 正直は最後の勝者である 一六六
- (卅三) 實業道德は實業的行爲の道德である 一七五
- (卅四) 實業家は金を儲けることを知つて使ふ道を知らず 一八五
- (卅五) 戊申詔書の聖旨と現下の状態 一九六
- (卅六) 實業家と小資本家 二〇三
- (卅七) 天然の富源に對する國民の注意 二一五
- (卅八) 實業家の教育と衛生 二二四
- (卅九) 労働問題は道德的に解決せねばならぬ 二三一
- (四十) 社會連帶主義 二六六
- (四十一) 産業的デモクラシー 二八五
- (四十二) 結 論 三〇〇

りは、獨り實業家のみに他の標準と異つた道徳のあるべき筈の無いことは固より明白である。畢竟實業道徳は渠等の實業的即ち經濟的方面に於ける活動 (Business or Economic Activity) に道徳の原則を宛嵌めたものに過ぎぬのである。されば假令其人が専門の商工業家にあらずとも、其事が實業的活動であれば、之を適用すべきは固より言ふまでも無いのである。

儲てさうなると人間の實業的活動とは何であるかといふことの説明が必要に爲つて來る。元來實業といふ言葉は何時から使ひ出したのであるか、又た誰が拵らへたのであるか、よく判からぬが、英語の Business という語を翻譯したのであることは明かである。然らば Business という原語が其用法伸縮自在で色々異つた意味に用ひられ、爲めに甚だ明瞭を缺いて居る如く、其譯語の實業と云ふ言葉も亦た頗る曖昧な言葉である。原語に於ては之を狹義に使ふ時には即ち商工業といふことであるが、廣義に用ひらるゝ場合には人間が營利の爲め、世渡りの爲め、生

計の爲め、金儲けの爲めにする凡ての事柄を皆包含して居るのである。即ち最も廣い意味の商行爲、經濟的報酬を得んとして爲す凡ての活動をいふのである。さればビジネス、マン (Business man) といふ語さへ金儲けの仕事に専門にして居る商工業家のことに使ふその普通の意味の外に、時には抽象的に凡ての人の經濟的即ち廣義の實業的方面に於ける性質を表はす爲めに、エコノミック、マン (Economic man) と同様に使はれて居る。専門の實業家の凡ての活動が盡く實業的で無い通り専門の實業家にあらざる人にも皆實業的方面の活動のあることは勿論である。實業的活動といふ言葉が斯の如く甚だ貧弱で、其意味も亦た大に明瞭を缺いて居るので、遺憾の無い様な定義を與へることは却々困難である。經濟學者は此行爲の動機や範圍に就て種々科學的に説明を試みて居るが、畢竟前に言ふた様に人間が世を渡り、生計を立て、其種々なる欲求を充す爲めにする所の活動であつて、社會の立場より言へば、其富の生産に寄與するもの、又自己の立場より言へば、

其經濟的欲求を満足する爲めの行爲であると言ふのが、假令科學的説明としては十分で無くても實際には餘り不都合の無い定義であると言ふて善からうと思ふ。尙ほ一言して置くべきことは普通農工商といふのに、唯だ商工業道徳として農だけを省いたのは何も別に深い理由があつてさうしたのでは無い。一つは簡單を欲する爲めでもあり、又一つは前に述べた様に農業を始め、鑛業でも林業でも漁業でも凡ての採 取 業は全く一種の工業であつて、其實業的活動は他の商工業の其れと何等異なる所が無いから、之を其中に包含せしめて別に其名を擧げなんだまでのことである。決して農業の道徳を實業道徳の外に置いた譯では無い。

二 實業には道徳は無いか

從來日本では商工業には全く道徳の制裁の無いものであるといふ様な考が一般に廣く行はれて居つた。甚しきに至つては實業と道徳とは氷炭相容れずして到底

兩立すべからざるものである。然るに餘り道徳をやかましく言ふ時には、實業家は神經質になり臆病になつて何も思切つた事が出来なくなり、其結果商工業は忽ち衰頹に陥つて仕舞ふと思ふて居る人さへ尠く無かつた。ツマリ斯の如き人は道徳を以て商工業の大敵、大禁物であるかの如くに之を呪ふのであるが、斯くまで極端に至らずとも、此二つの者を以て全く關係のないものとして、商工業を全然道徳の範圍外に置かんと欲し、又或は假りに多少の關係があるにしても實業上の行爲は一種特別のものであるから、普通一般の道徳的規範を以て之を律するのは甚だ無理であると言ふのは、今日に於ても猶ほ多くの人々の頭腦を離れない考である。斯る思想が廣く世間に行はれて居るが爲めに、我國の商工業が今猶ほ其品位を高むること能はずして、頗る陋劣なる状態に在り、世界の不信用と侮蔑とを招くことの多いのは如何にも残念至極である。

商工業道徳に對する斯の如き考は元來二つの原因から來て居るのであると思

ふ。即ち一つは従来我國人の商工業に關する思想が甚だ幼稚で且つ低かつたのと今一つはその道徳といふことに關する考が間違つて居つたからである。而して尙ほ之を助くるに種々なる歴史的の原因もあつたのである。されば此より商工業の眞の性質を闡明し、且つ道徳の如何なるものなるやを論述して、先づ其誤謬の源を正すのが最も肝要であると思ふ。

三 商工業に關する誤つた考

商工業は一言以て之を言へば種々の方面を有する人間の全き活動中の一方面である。即ち政治、宗教、教育、文藝等が皆人生の一部を成して其々に本領を有するが如く、商工業も亦た人間活動の一部にして乃ち人がこれに依て生計を營み、所謂營利的欲求を充すのが其本領である。されば人間の行爲が各方面共に皆道徳の支配を受くるものなりとすれば、獨り商工業に關する其行爲のみが其圏外に在

るといふが如き理由は萬々ない事である。英國の大儒マシニー、アールノルドは人生の四分の三は皆行爲であると言ふて居る。即ち行爲とは善とか悪とかの性質を帯びて道徳の制裁を受くべき人の働きを言ふのである。實に其言の如く、平常其習慣と爲つて何等の考慮をも用ひず、殆ど無意識的に、殆ど機械的に爲して居る事でも、仔細に吟味する時には大概其人の内に存する人格の外に發露するものならざるは無い。此點よりすれば余は尙進んで人生の九分九厘までは皆道徳の支配を受くべき行爲であると言はんと欲するのである。矧んや最も深き考慮を要し、飽まで其利害得失を商量して後初めて手を下すことの多い商工業的活動に於てをやである。若し言ひ得べくんば余は商工業的行爲は人間の凡ゆる活動中、道徳に最も多く且つ最も深き關係を有するものであるとさへ言ひ度いと思ふのである。

四 道徳に關する誤つた考

又從來道德に關して誤つた見解の行はれて居た事もその一つの原因である。チ
 ユウイー博士の言ふた様に道德は爲すべからず(Do not)より爲すべし(Do)とな
 り、それより更に進んでたるべし(Do)に成つたのである。獨り我國のみならず
 何處に於ても幼稚なる最初の道德は皆其の範圍の頗る狭い消極的禁止的のもので
 あつた。佛教の五戒でも基督教の十誡でも皆此眞理を示さざるは無い。されば道
 徳は非常に峻酷なるものであつて、高尚なる士君子の行爲は之を以て規制するの
 價値ありとするも、下賤なる商工業者に向て之を強んとするは恰も雞を割くに
 牛刀を用ふるに齊しきもので、勿體な過ると思ふたのであらう。假令斯の如くに
 商工業を以て全然道德圏外に在りと爲さざる者でも、斯る窮屈なる道德の規則を
 之に課する時には商工業家は、只々臆病になつて遂に手も足も出すことの出來ぬ
 様になるであらうと懸念したのは強ち無理の無い事である。斯る考を懐く所の人
 は、假し商工業が道德の支配を受くべきものであるにしても、之を普遍一般の規

範に依て律するのは甚だ苛酷である。寧ろ出來得る丈の割引をして、最低度の標
 準を設け、商工業の行爲だけは寛大に一種特別の取扱をするのが適當であると
 思ふたのである。されば商工業者自らは固より言ふに及ばず、他の事柄に就ては
 随分八ヶ間敷い人々までが、獨り商工業に關する行爲に向ては頗る寛大であつて
 如何なる惡事醜行が其目の前に行はれても殆ど知らざるが如く冷然として之を看
 過するのである。實業道德に對する國民の考が斯くの如きものである間は、到底
 其向上進歩は得て望むことは出來ぬのである。
 斯の如く商工業を全然道德の制裁外に置かんと欲し、又は獨り之れ丈には寛大
 なる一種特別の待遇を與へんと欲するが如きは、一見商工業者に對して頗る同情
 ある味方の如くに見ゆれども、實は反て之が爲め商工業は眞の發展を阻礙せられ、
 愈々深く墮落の淵に陥つて再び浮む瀬が無いのである。

五 何故商工業は賤まれたるか

前に述ぶるが如く苟も商工業が人生活動の一部であり、而して道徳が凡て此等の行爲を支配する所の規範である以上は、獨り商工業のみが其制裁を免かれ、又は他に異りたる一種特別の待遇を受ると言ふが如きことは決してあるべき筈がないと思ふ。然るに實際に於て斯の如くなるは、全く商工業に關し又は道徳に關する誤解謬見から起るものであることは既に論じたる所の如くである。併し乍ら斯の如き誤解謬見の起るのも強ち無理からぬ事情のあることを否むことは出来ぬ。如何なる國に於ても、社會の猶ほ幼稚未開なる時には人生は頗る單純にして其活動の範圍も亦從つて甚だ狹隘であつた。其故唯だ弓矢を以て鳥獸を獵するとか又は劍戟を以て敵と戰ふとか言ふ様な勇ましい武張つた事のみが社會の優秀者の任務となつて、其他凡ての地味な平和的事業は盡く之を婦人若くは奴隸等の手に任

かせたものである。斯る社會の狀態なりしよりして、終に獨り華々しい武勇の代表者たる武士のみが持囃される世の中を現出し、質實にして地味なる職業の商工業者は却て殆ど賤民視せられ、土芥の如くに輕侮せらるゝに至つたのである。されば斯の如く輕侮せられた人々の爲す仕事は其何たるを問はず、共に併せて之を輕侮するに至るのは是れ固より自然の數である。かの南北戦争以前に奴隸制度の行はれて居つた米國の南部諸州に於ては、農業上の勞作は渠等が殆ど禽獸と同一視して居つた黒奴の手にて爲せしが故に、普通の人民は之を最も下賤なる仕事として甚く輕侮したるが如き、よく此間の消息を漏して居る。

さなきだに社會の狀態よりして、斯の如くに輕侮せらるべき運命を有して居つた商工業は不幸にして、自らに於ても亦た輕侮を招くべき性質を有して居つたのである。如何に幼稚なる社會に於ても食料の供給者たる農業の必要なることは夙に認知せられたるが故、農は國の本なりとして比較的尊敬を受けられたれども、欲望

寡き未開人の眼よりは工や商は殆ど無用視せられ、否時には有害視せられたるも、洵に己むを得ざる次第である。殊に商に至つては少しも自己の額に汗せず、只だ奸智を弄し、詭計を用ひて暴利を貪る社會の寄生蟲として取扱はれたのも是非なきことである。而して斯る時代に於ける商業の状態如何を見ると、已にも亦た斯の如き非難と輕侮とを甘受せねばならぬ事實があつたのである。商業は他より輕侮を受けるが故に愈自ら其品位を墜し、其品位を墜すが故に益々他の輕侮を受けるのであつて、互に其原因となり結果と爲つて其墮落は殆ど底止する所を知らざるに至つたのであつた。日本に於ても商業は掛引である、虚言を言はねば商賣は出來ぬものと思ふて居つた時代があつたのであるが、西洋諸國に於ても亦た同様であつたと見え、學者の研究によると、今日交換の意味に用ひられて居る、獨逸語の Tauschen も英語の barter も皆其語源を釋ぬると、本は欺すといふ言葉から起つたのであるといふ。當時に於ける商業状態の如何に劣悪なりしやは此一事によつて

も十分に推測せらるゝと思ふ。

六 往時我國に於ける商工業の狀態

維新前我國に於ける商工業の狀態は如何なるものであつたか。封建尙武の世の常態として獨り武士のみが幅を利かせ、花は櫻木人は武士、商工業者は素町人として人にして人にあらず、殆ど士界の如くに輕んぜられて居つたのである。是は勿論社會組織の然らしむる所にして、商工業者自らの如何とも爲すこと能はざる所なりとは言へ、彼等は之が爲め自暴自棄に陥り、如何なる醜惡下劣の事をも敢てして憚らざるに至り、愈々其品位を墜すのみであつた。曾て神戸クロニクル新聞の記者ヤング氏も日本に於ける實業道德の墮落を論じて其依て來る所の原因は封建時代に於て、大に商工業を輕蔑したる風習に在りと言ひ、又先年リオ、デ、ジャネイロに於て全米會議の開かれたる時、ニュー、ヨークのアットルック新聞から

派遣せられたシルヴエスター、バクスター氏は其通信に於て、ブラジル人の商業
 道徳の甚だ低きことを論じ、恐く之が原因は恰も日本人の場合と齊く其有識社會
 の人々に、商業は其本來の性質に於て不正不純のものなるを以て卑穢劣悪なる利
 己心の外、他に人の能力を用ゆべき餘地なしと爲す考が一般に行はれて居るが爲
 めであると述べて居つた。古來我國に於て商工業が非常なる輕侮と虐待とを被り
 し結果、浮む瀨も無き墮落の淵に沈んで居つたことは普く世界に知れ渡つた事實
 にして、是が今日に至るまで我國の進歩發展の上に大なる累を爲して居ることは
 實に慨嘆の至であると言はねばならぬ。

七 現今は何ふてある

然れども否極れば復た泰を生ずるのは天地自然の道理にして、維新の改革と共に
 我國の商工業には又一陽來復の春が來たのである。封建制度の瓦解と共に從來

獨り幅を利かして居つた武士が其常職を解かれて、四民平等の待遇を受けることと
 なり、今まで輕蔑せられて居つた農工商が遽に其頭を擡ぐべき運に向かつた。而
 して爾來愈々廣く世界先進の諸國と交り愈々文明の空氣に觸るに従ひ、國家は決
 して獨り武士の力のみにて立つものにあらず、商工業が社會の存在に必要なるは
 敢て何物にも譲らざる道理の愈々明白となるに至つて、從來士芥の如くに輕侮さ
 れたる商工業は愈々其價値を認めらるゝに至つたのである。爾來文運の年と共に
 進むに従ひ、一方に武士の尾羽打枯して益々悲境に沈むに反し、一方には商工業
 家は愈々世の尊敬を受けて獨り大意張を爲す世の中となつた。されば商工業の品
 位も亦大に改善進歩すべきが當然の事であれども、因習の久しき、病は深く其膏
 盲に入り、殆ど常習の如くになつた其醜惡下劣の行爲は中々一朝一夕にして改む
 ること能はず、今日に至るも尙ほ商工業家自らは言ふにも及ばず、世間一般の人
 々までが獨り商工業に關する行爲に關しては他と異つた大割引の道徳標準を以て

之を視、如何に怪しからぬ行爲を爲すも之を寛恕して咎めざるが如き状態の今尙は改まらざるは前に述ぶる如くである。

八 實業家未だ己が天職を自覺せず

商工業者の社會的地位は斯くの如く大に昂上したるも、商工業其物は尙ほ依然として舊時の陋態を存し、未だ著しき改善進歩を見ること能はざるは果して如何なる理由によるのであらうか。勿論長き習慣がその第二の天性となり容易に之を改むることの出来ぬのが、大なる原因たるには相違無いが、畢竟商工業の眞の性質か未だ十分に渠等に知得せられざるが爲め、動もすると暗黒なる商工業家の腦髓を自暴自棄の亡霊が侵して之を攪亂するからである。商工業其物が決して賤むべく惡むべきもので無いことは既に承知しても、さればとて其が非常に尊貴である、神聖なるものであると言ふ自覺は未だ商工業者自身の心にも起らず、従つて

世間一般の人々も爾かく思はぬのである。されば商工業家が十分に其爲す所の事業の性質如何を解得し、其の職任の如何に尊貴神聖なるかを自覺するに至つて、初て我國商工業の改善進歩は期することが出来るのである。故に余は是より進んで商工業が人間の行爲として最も尊貴神聖なる所以を述べ、以て先づ商工業者に向ひ、次には世上の人々に向ふて大にその注意を促したいと思ふのである。

九 人生に於ける商工業の効用

前にも言ふた通り商工業は人間の活動の一方面であつて、其範圍は人生の進歩し社會の發達するに従つて漸次に擴張するのである。かの野蠻蒙昧の世に於て人が唯だ其周圍に在る天然物に依て生活して居つた間は、商業や工業の起るべく必要も無く、亦其機會も無かつたのである。かゝる社會に於ては只だ常に争鬪をのみ事とし、他の種族と戦ふて人を殺し財を奪ふのが生存の唯一の目的且つ手段で

あつた。東西古今の歴史を見るに商工業の發展と戦争の減少とは必ず文明の進歩に伴ふもので、人智の開け文明の進む程殺伐なる戦争的行爲は其領分を縮められ之と反比例に平和の商工業的活動が其範圍を廣めらるゝのである。されば商工業は正義と平和との使者として世に見はれ出たものであつて、之を文明の表號と稱すべきである。而して其人生の進歩に及ぼしたる効用に就ては如何なる稱讃の語を以てするも決して之を盡すことは出来ぬと思ふ。血は水よりも濃く、小き原始的社會に於ては其人々の間に皆血族關係の存するが故に之によりて固く結合せらるゝも、其次第に成長發達し、人員の増加すると共に其相互間の關係は又前日の如くに濃厚なること能はず漸く疎遠ならんとするに及んでも、尙之をして親密ならしめ之を結合せしむるものは主として利害共通の關係である。而して商工業の社會に於ける天職は即ち所謂厚生利用の爲めに貢獻するのである。

若し原始的社會に於けるが如く、個人も家族も皆己れの要する所の物は盡く自

ら己れの手を以て之を作ると言ふ如き状態であつたならば、如何ぞ相互の間に相頼り相助るてふ關係を生ずることを得ん。されば商工業の發達は大に社會の基礎たる互惠的精神を養成して其の結合を固ふるのであるが、尙ほ其上に人間相互の關係は必ず正義により公平でなければならぬと言ふ觀念は之によりて教へらるゝのである。勿論利益に迷ふのが人間の弱點であるから、動もすると交換には詐欺不正の行爲の行はるゝことを免れず、殊に野蠻の世界に於て之が最も露骨であつたことは、前に言ふた如く獨逸でも英吉利でも詐欺といふ言葉が交換といふ意味に轉用せらるゝ様になつたといふのでも知られるので有る。其故世には交換の起源も詐欺であり、交換の性質も亦た詐欺であるとし、交換は詐欺と共に終始すべきものであるかの如くに思ふて居る人もある。併し乍ら交換其の物は決して斯の如き不正なるものに非らざるのみか、其本來の性質は受けたる丈け與へ、與へたる丈受ると言ふ最も公平なる正義の觀念より起つたものである。若し此觀念な

からんか、何にも煩^{わづら}しい交換の手数を須^{もち}ふるに及ばん、騙^{へん}取強奪露骨に心の儘^{まま}を行ふて憚^{はげ}らざるべき筈^{はず}では無いか。然るに此に出でずして彼に出づるものは即ち交換^{かうかん}が正義の觀念の實現^{じつげん}であることを證明^{しょうめい}するものであると言はねばならぬ。イリー博士は亞米利加の土蕃^{どはん}の中に行はれたる贈物^{おくりもの}の授受^{じゅうじゆ}と商賣との間に密接^{みつせつ}なる關係^{くわんけい}のあることを述べて、次の如く言ふて居る。土蕃^{どはん}は他人から贈物を受取れば必ず之に相當^{さうたう}したる物を返へさねばならぬ義務があると思ふて居るのである。曾^{かつ}て加那太^{カナダ}の土蕃中に傳道したる一人の宣教師^{せんけうし}の話に、一日彼の許^{もと}に進物として鹿肉^{しかにく}を携^{たづ}へ來つた土蕃ありしを以て彼は渠等^{かれら}が其返報^{へんぱう}として何物をか得んと欲するものなるを知り、其求^{もと}むる所の何なるやを問ひたるに、渠等^{かれら}の目的は葡萄酒^{ぶどうしゆ}と火藥^{くわやく}なりしを以て、固より宣教師が斯る物を所持^{しよぢ}して居るべき筈もなく之を與^{あた}ふるに由なかりしかば、渠等^{かれら}は其求^{もと}むる所の得べからざるを見るや一旦差出したる鹿肉^{しかにく}を再び其手に納^{おさ}めて早々^{さうさく}立去つたと言ふことである。土蕃^{どはん}の爲したる所は如

何にも現金主義^{げんきんしゆぎ}の様ではあるが、其天真爛漫^{てんしんらんまん}露骨^{ろこつ}にして無邪氣^{むじやき}なる處^{ところ}に遺^{おち}るから呉^ゝれ、呉^ゝれねば遣^やらぬといふ互惠主義^{ごいしゆぎ}が最も遺憾^{いかん}なく表白^{へうはく}せられて居る。以上述ぶるが如く商工業は元來人の自然の性情より起つたものであるから、其中には平和^わも正義^{せいぎ}も互惠^{ごい}の精神^{せいしん}も皆籠^{こも}つて居る。されば社會の進歩^{しんぱ}も人類の幸福^{かうふく}も皆商工業^{しょうこうぎやう}に依^{よつ}て初^{はつ}て得^えらるゝことが明かである。

十 商工業は社會の進歩と共に其効用を増す

商工業^{しょうこうぎやう}は斯くの如く社會の進歩と人類の幸福^{かうふく}との爲めに缺^かくべからざる最も重要^{じゆうじやう}のものであるが、是れ亦た進化^{しんくわ}の法則^{はふそく}に依^して支配^{しはい}せられ、社會の進化^{しんくわ}に伴^たふて進^{しん}化するものであるから、いつも其効用^{きこうりやう}が同一であるのでは無い。例^{たと}へば未だ其れ程切^{ひつよう}に其の必用^{ひつよう}を感^かせざる未開^{みかい}の社會に於ては、商工業^{しょうこうぎやう}の任務^{にんむ}と言へば多數人^{たふじん}の爲めに廣^{ひろ}く厚生^{こうせい}利用^{りよう}の道を開^{ひら}くにあらずして只纔^{わづか}に極少數^{ごくせうすう}なる貴人^{きじん}富者^{ふしや}の欲^{よく}

望を満たし奢侈贅澤の品を彼等に供給するに過ぎなんだ。されば斯る時代に於ては商工業が一般人民の爲めに無用視せられ否時には有害視せられたるのも全く理由の無い事では無い。然れども社會の進歩に伴ひ商工業の漸次に發展し、廣く恩澤を一般人民に及ばすに及んでは、如何なる人と雖も其効用を認めずには居られない。アダム、スミスは分業の廣く行はれて商工業の大に發達したる文明國に住む極貧の勞働者でも、幾萬人の臣民に對して生殺與奪の全權を其手に握る阿非利加の國王よりも其衣食住に於て遙に勝つて居ることを論じて居る。畢竟文明國の人が其貧富貴賤に拘はらず、精神上にも物質上にも大なる幸福を享受して居るのは全く商工業の賜であると言はねばならぬ。

近時に於ける運輸事業の發達を以て之を例すれば、西洋諸國に於ても今より百年の前までは海運は只纜に富める人の爲め奢侈贅澤の品を供給するの具たるに過ぎなんだが、造船業の進歩により大なる蒸汽船の續々建造せられたる結果は、大

に其運賃を減じ、今は世界萬國の多數なる中産階級以下の人々の幸福の爲めに奉仕することを以て其主なる任務とする様になつた。世界の船舶に積載する貨物の四分の一以上が石炭である事實より考ふるも、一般人民が海運の發達により如何なる恩恵を被つて居るか想像せらるゝのである。又四十年前には米國から英國へ輸送する小麦の運賃も一噸殆ど六弗であつたが、前世紀の終頃には己に二弗以下にまで低落したことが珍しく無つた。又旅客に就て言へば蒸汽船が大西洋の航海を初めた頃には航海日数は十五日を要し、其運賃は百五十弗なりしが、後に至つては其日数は半分に減じ、運賃も亦た殆ど五分の一にまで低落し、且かも以前に比すれば其航海の安全なることも其取扱の丁寧なることも固より同日の論では無いのである。陸運の方に於ても亦然りであつて、蒸汽鐵道の發明以來之が爲めに人類の得たる利便と幸福とは到底筆紙に盡されぬ程である。是れ又米國に就て其例を取れば、今日旅客が大陸を横斷して其西端なる桑港より東端なる紐育ま

で行くの要する日数は、百年前に紐育より華盛頓に旅行するのに費したる時間よりも少くして足るべく、貨物の運賃に於ては南北戦争の終りたる頃には、まだ一哩一噸三仙以上なりしが次第に減じて第十九世紀の末には僅に一仙の四分の三にまで低下した。

されば今日其鐵道が公衆の爲に利用せられて居ることは實に驚くべきものにして前の國勢調査を行ひたる年、即ち一千九百年の旅客の延人員哩數は三百二十三億哩、荷物の延噸哩數は二千五百五十億哩といふ實に想像も出來ざる數字に上つて居るのを見る。シーガー教授は更に之を説明して、一人の馭者が二頭立の荷馬車に一噸の荷物を積んで一日に廿哩を行くことが通例であるとせば、此割合で前に述べたる一年間に鐵道で輸送したのと同じ丈の荷物を輸送するには、年中一日も休まずして三千四百九十三萬一千五百七輛の馬車を動かさねばならぬ。而して之に要する馭者には、十六歳以上の米國の男子が皆總掛りに爲つて掛つても

尙ほ足らぬと言つて居る。只運輸丈に就て見ても實業の發達が人類の爲めに益する所の如何に大なるやを推知することが出来る。されど斯る事は別に外國の例を引くまでも無く、今日我國の實際に就ても多々見らるるのである。

十一 智識の進歩と實業の墮落

斯の如く商工業は之が因となり又果となつて、人智の進歩及び社會の發達に伴行し益其効用を増すものであることは前項に於て述べた如くであるが、是は光明の側より言ふのであつて、暫く眼を轉じて其の暗黒の一面を見ると、商工業は却て人智の進むに従ひ之と逆比例して益悪化せらるゝ様な事實がある。乃ち未だ開けぬ世の中の商工業には固より澤山に不義不正が行はるゝが、其不正不義は極めて露骨で、極めて單純であるから之を看破することも易く、且かも極めて小規模であるから其害の及ぶ所も亦た甚だ大ならずして、寧ろ其罪は輕いのであるが、

社會が進歩し人智が開けて、實業の組織が次第に複雑を加ふるに至つては、悪事の方法も頗る巧妙辛辣を極めて容易に其悪事たることを知り難く、且かも其規模甚だ大なるを以て其害の及ぶ所も亦従つて實に廣且つ大である。我國に就て言ふても今日に於ては最早開港當時に於けるが如く、種紙に菜種を張付けたり生糸の中に天保錢や鐵砲彈を包め込んだり、漆と言ふてトロ、芋を賣つたりする様な露骨な事はする者はあるまいが、更に之よりも巧妙にして陰險なる大規模の詐欺手段が盛に行はれて居ることは誰も否定することが出来ぬのである。

今日米國の社會を茶毒して居るトラストの如き、若くは後に論じやうと思ふて居る戦前に於て悪辣を極めた獨逸の對外貿易の手段の如きは、遺憾なく此間の消息を漏して居る。先年も米國の元老院に純良食料品に關する法案の提出せられた時、議員ヘイボルン氏は有名なる醫師の説として年々米國に於て不純不良なる藥品の爲めに命を殞す所の小兒の數は、恐らく三十萬人の多きに達するならんと

述べ、又其際化學者ブルックス氏が世に公にした論文中には、米國に於ける食料品の一割五分が不正不良の物であることは、殆ど専門學者の皆一致する所であるから、若し米國人民が毎年食料品の爲めに費す所の金額を無慮六十億弗なりとする時は其一割五分即ち九億弗は不正不良の品であつて、米國人民は皆巨額の金を拂ふて有害なる品物を買つて居るのであると言ふてある。歐洲大戰の勃發以來、我國の商工業が非常なる進歩發達を爲したる事は、世界の驚嘆する所であるが、一方に於ては斯る非常なる進歩發達のあつたと共に、他の一方に於ては亦た非常なる商工業の墮落を來したることも驚くべきである。

さらば商工業の墮落は其進歩發達には必ず伴ふべき副産物であるとして諦むべきであらうか。否決して斯の如き道理は無いと思ふ。是れ主として利益の誘惑に對して甚だ意氣地の無い人生の弱點よりするものではあるが、又商工業に對するその當初の考が間違つて居ることが大なる原因であると思ふ。即ち古人の言ふた

如く毫釐の差より千里の繆を生ずるのである。されば固より心の誤であると共に又頭の誤であることを知らねばならぬ。斯の如く當初に於て間違つたる考が、更に間違つたる理屈に依て辯護せられ且かも強大なる利己心が其動力となつて之を推進するのであるから溜らない。基督も「真理は汝等に自由を得させし」と言ふて居るが、斯る強大なる誤謬の羈絆から解放して商工業に自由を得させるものは真理より外には何物も無い。而してこゝで真理とは即ち真正なる道徳上の智識と觀念とを言ふのである。

十二 此に倫理學の必要がある

真正なる道徳上の智識と觀念とは何に依て得らるゝであらうか。修身道徳の原理を教ゆる倫理學の研究を措て他に其道の無いことは言ふまでも無い。然し乍らこれには随分反對の意見を唱ふる人も尠くあるまい。斯る人の考にては商工業者

は専ら實際を重しとする者であるから道徳の規範だとか、善悪の標準だとか、倫理學の理論だとか言ふ様な事に心配して居る事は事實上望むべからざることであるのみならず、若しも斯る事に其心を勞する時は、趙起逡巡肝心の事業は遂に一つも出来ぬ様になる。されば假し商工業に道徳があるとしても、之が判断は常識の力に依つて十分に出来るから、陳文漢の倫理學の理論などは更に其必要を認めぬと言ふのである。勿論何事によらず常識の大切なることは明かであつて、殊に商工業に於て然りである。偏屈な融通の利かぬ實業家位厄介な者は世の中にあるまい。されば從來動もすれば道徳とは殆ど何の關係も無い様に思はれ、否寧ろ反對するものゝ様に考へられて居た商工業的行爲に關して斯くの如き極端なる常識論の唱へられるのは敢て何の不思議も無いことである。

併し乍ら常識は神託にあらず、默示にあらざるが故に、唯だ何事をも常識の指導にのみ任かせて必ず誤謬なしと言ふ譯には行かぬ。智識と伴はざる良心は動も

すれば其判断を誤つて却て其人を不善に陥るゝことがあるが、常識も其通であつて、根據なき常識は頗る危いものである。故に余は人生の實際を了解せず、一切萬事自分の獨斷的に定めたる議論や、規則を押し通さんとする如き空想的倫理學者には與せずと雖も、亦た前述の如き極端なる實際主義の常識萬能論にも同意することは出来ぬ。畢竟斯の如き人は倫理學に就ては勿論のこと、自己の主張する常識其物に就ても十分によく了解して居らぬ人であると思ふ。されば是よりまづ第一には極短簡に倫理學は如何なる物なりやの説明を試み、次には常識に對する誤解を聞き、更に進んでは兩者の間に存する密接なる關係に就て論じて見たいと思ふのである。

十三 倫理學とは如何なるものぞ

倫理學に學者の下だす定義は種々様々である。今その二三を摘出すれば或は人

の行爲の學なりと言ひ、或は善惡を論ずる學なりと言ひ、或は義務責任を説く學なりと言ひ、或は道德の原理を教ゆる學なりと言ひ、或は人の社會的責任を論ずる學なりと言ひ、或は人生の價值、標準、理想、目的等を研究する學なりと言ふ如く種々なる定義を與ふるのである。然りと雖、斯る定義の不同は畢竟短簡に倫理學の全範圍を言ひ盡すべき言葉が無いから起る結果であつて、實際に於ては何にも別に意見の相異があるのではない。されど斯の如く多くの定義が下されて居るが、或人の倫理學は「行爲の學にして人生の術である」と言ふたのは、假令眞の科學的定義としては如何であるか知らぬが、甚だ簡明で且かも善く實際的に倫理學の目的を言ひ盡して居ると思ふ。又た近頃米國コロンビア大學の總長バットラー博士が經濟學は生計の學、倫理學は行爲及び奉仕の學であつて、之を調和し之を結合するのが政治學の本領であると言ふて居るのも甚だ要を得た説明であると思ふ。乃ち倫理學は一方に於ては一の深遠なる科學であると同時に、他の一方

に於ては全く實際的なる處世の藝術であるとも見ることが出来る。倫理學は道德の價值標準を定むる規範的科學であると共に、亦た人生の方向を指導する應用的科學である。

夫れ人間の生涯は内部の勢力と外界の事物との關係より成るもので、常に之を整調して正當なる關係を保持することが肝要である。而して此等の關係を正當に保維する所のものを稱して善と言ひ、其然らざるものを呼んで惡と爲すのである。されば若し常に此善惡の標準を前に置いて其行爲を規正して行かぬ時には決して人生の正鵠に向て進むことは出来ぬ。而して此標準を示し、光明を與へて人生を指導するのが即ち倫理學である。故に希臘の哲人アリストートルは倫理學を以て特に人が人として有する行動及び其卓越したる點を研究するものであると言ひ、英國の大儒ロツクも亦之を人類一般の當然の學問及び本分であると論じて居る。此を以て或意味から言へば道德の前には貴賤も無く、老若も無く、貧富も無く、

男女もなく、智愚も無く、國籍、人種の別もあること無く、斯の如き差別は一切消失し去つて残る所のものは唯だ平等の人あるのみである。死は人を一切平等ならしむるものであると言ふが、此意味より言ふ時には生も亦た人を平等ならしむる點に於て何も死に異なる所は無い。從來道德を以て煩瑣な窮屈な規則づくめのものと思ふて居つた人は單に其差別の方面にのみ眼を注いで、肝心の一致の方面を忘却する傾きがある。道德を論ずるには分解的なる前に先づ綜合的に之を研究することが必要である。唯だ其幹や枝や葉を別々に見るのみにて、其樹全體を閉却する様なことは倫理學の研究に於て動もすると陥り易き誤謬たることを記憶せねばならぬ。

又倫理學の理論に明かるき人が必ずしも實際の道德家たるにあらず、醫者の不養生又は論語讀みの論語知らずと言ふ諺の如く、理論と實際とは多く相伴はざるものであるとの理由を以て倫理學の無用を唱ふる人もある。然れども斯の如き事

は取て唯だ倫理學に於てのみ然かるにあらず、凡ての藝術に於ても亦た皆之を認むるのである。單に詩人のみ生まるゝにあらず、繪畫でも彫刻でも凡て藝術に秀でて名を成す人と言へば學習の効よりも寧ろ其生れつきの天才に由るのが多いことは成程事實であらう。乃ち凡ての藝術には到底一つの學問として其中に包羅し盡し難きものがあるのである。倫理道徳も或る意味に於ては一の藝術であるから完全なる度まで之を行ひ得る者は實に稀有の道徳的天才の外には無いであらう。併し乍ら如何なる平凡の人でも苟も人である以上は、皆道徳的素質を具へて居るのであるから、或る程度までは決して學んで得られぬ譯は無いと思ふ。孟子は堯舜も人であり我も亦た人であるから、決して堯舜を懼れる必要は無いと言ふて居る。而して倫理道徳上に於ける天才と言へば即ち古今東西の聖賢君子であるから斯る聖賢君子の行爲と教訓とを基礎として成れる倫理學が人生の行路を照らす一大燈明臺たることは取て喋々するまでもない。

パーマー氏は其「倫理學の範圍」中に「我々の世界は誰も知る如く一つである。故に唯だその一に限つた觀察は何であつても必ず不完全たるを免れぬ。種々ある其科學は互に相頼り相助るものであつて、各自それ々に唯だ特別なる一の觀察點を有し、それから共同の物象を研究するに過ぎぬのである」と言ふて居るが、この考でさへ居つたならば倫理學を學ぶ人が偏屈や固陋に陥る氣遣いは無いと思ふ。倫理學者が動もすると固陋や偏屈に陥るのは畢竟其眼界が狭いので起る弊害たるに過ぎぬ。世には倫理學は唯だ理論であつて、實際には縁の遠いもの、様に考へて居る人が尠く無いが、是は大なる誤である。之に反して倫理學ほど人生に關係の深い最も實際的なる學問は恐らく他にあるまいと思ふ。

詩人ポーブは「磨いた智慧も高い智慧も其効用に於ては常誠の半分にも及ばぬ」と言ふて居る。世界は常に進歩して片時も止まらず、人生は又始終變轉していつも同きことは無い。斯の如く複雑紛糾せる活世界に處する活人間の行爲は單に前

以て豫め定め置きたる杓子定規の規則のみに依頼して居ることは出来ぬ。如何に澤山の書物を読み、如何に高遠の學理に達しても、よく之を消化し之を活用して其時と其場合とに適應したる道徳的行爲を産み出すことの出来ぬ者は所謂飯食ふ字引、歩く本箱、論語讀みの論語知らずで、實際何の役にも立たぬ腐儒たるに過ぎぬ。而して活きた人間として世を渡るには常識が何よりも肝要である。故にマーシャル教授の如きも「何れも實際問題に於ては常識こそは最後の裁斷者である。實際の教訓を設け、若くは處世の規則を定むることは敢て學問の本領では無い」と言ふて居る。

實際道徳の上に常識の必要なること斯くの如くなりとせば、實際的の最も實際的なる實業の道徳に最もその必要なることは言ふまでも無い。而して今日の商工業家中には、常識に富んだ所謂實際的人物に甚だ乏しからざることは、其人の爲めにも亦た國家の爲めにも大に慶すべきである。然れども其所謂常識なるものは

果して倫理學の光明に依て指導せられ訓練せられたる眞の智慧であるか、又或は粗野濫味動もすれば人を不善に陥る、似而非常識ではあらざるか。嘗てラスキンは「驢馬の良心」といふ奇警の語を吐いて居るが、余は常識にも猿の常識があつて、今日多くの實業家が有せりと誇る常識は、或は之に屬するものでは無いかと竊に掛念するのである。實業は實際的の最も實際的なるものであるのみならず、人間の活動中最も危険なる誘惑の多いのも亦此方面に過ぐるは無いと言はねばならぬ。されば商工業に従事する人々は他の地位と職業とに在る者よりも一層常識の必要を感ずること切なると同時に、又其常識は最もよく洗練せられ訓練せられたる高尚純良の常識でなくてはならぬ。

然るに今日世の中に於て普通一般に常識に富んだ人と言ふのは唯だ融通の利く如才のない、悪く言ふと輕薄才子に過ぎぬのである。斯の如き人は何等の主義主張をも有せず、唯だ其時の都合次第で風のまにまに變通するから、或は巧に一種

の成功を博することもあるであらう。然れども何の主義も無く何の光明も無く、恰も暗中に物を探るが如く、單に萬一を僥倖することを以て、其行爲の標準とするが故に、時には非常なる過失に陥り獨り其一身を誤るのみならず、大なる害毒を世に流すことが尠く無い。真正の常識は決して斯るものにはあらずして、我々に居常事に觸れ、物に應じて直に其れ、是非善惡の判定を下して誤なきを得せしむるのが其力である。サア、ウイリアム、ハミルトンの定義によれば「萬人の齊しく之を天より稟け、而して之に依て知識の眞偽と行爲の善惡とを判定し得る所の力を稱して常識と言ふ」とある。されば此人類天賦の常識を指導訓練するに、倫理學の大則を以てすれば、實に是れ所謂錦上添花を添ふるものであつて、之に依て誤なく次第に眞の道徳的生活に向て進んで行くことが出来るのである。倫理學は常識に依て活き、常識は倫理學に依て其の効用を完ふることが出来るのである。

十四 倫理學の本領

倫理學が一の科學として取扱ふ對象は何であるか。善惡正邪の區別であるとも言へれば、品性行爲であるとも言へる。人生の價值、理想、標準であると定義することも出来る。其他種々様々に解釋する者あれど要するに唯だ其觀察の點を異にするより起る相異であつて、歸する所は一つであることは前に言ふた通りである。余は倫理學の主要問題は「人生の目的」であると信ずるから先づ順序として之より論ずるのが一番都合が良いと考ふるのである。

人が萬物の靈長として、理性的動物として世に在るのには必ず其存在の大目的がなくはならぬ筈である。人には其の地位や性質や好尚やによつて各異なる多くの目的あることは勿論であるが、苟も人たる以上は其貧富、貴賤、老若、男女賢愚等の差別を超越し、唯だ人たる故を以て凡ての人に共通し、而して此等各

の種々なる小目的が之によつて支配せらるゝ所の最大最高の目的があるべき筈である。而して人の品性も行爲も徳の價値も善惡正邪の標準も皆此目的の如何に依て定まるのである。

今若し人に向つて「人生の最大最高の目的は何であるか」といふ問を出したならば必ず「人の人として生れたる天性を十分に遂ぐるのである」と答ふるであらう。スピノザが「智者の研究すべきことは死に非らずして生なり」と言ふたのも恐らく其意味であらう。即ち之を言換れば「善く生るる」と「to live well」が、人生第一の目的であつて、従つて倫理學に於ける重要な問題である。斯の如く人には人として誰にも其生活を支配する最大最高の目的のあることは、誰にも異存の無き所であるが、其最大最高の目的が果して如何なるものであるか、又「善く生るる」と言ふ善くとは果して如何なる意味であるか、之に就ては人々皆大に其意見を異にして居るのである。而して此意見の相異は主に人生に關する見解の相異から生

ずるのであつて、昔より氷炭相容れざる二個の人性論が、倫理思想の上に深大なる影響を及ぼして居るのであるから、此に少く之を説述することが甚だ必要であると思ふ。

十五 二つの異つた倫理學

支那でも昔から學者の間に人性に就ての議論は随分八ヶ間敷いものであつて、孟子は畢生の力を傾注して人性の善なることを主張したが、之に反對して或は人性には善惡なしと説き、或は人性は惡であると論ずる者もあつた。即ち告子や荀子は孟子の性善説に對して異論を唱へた人である。これとは少く其趣きを異にして居るが、西洋の倫理學史に於ても人性觀の相異から其倫理學説に全く反對の潮流を生じた事實がある。

西洋に於て夙に倫理學の組織的に研究せられたのは希臘であつて、其源はソク

ラテースより出て居るのである。勿論ソクラテースも基督や孔子の如くに其人格及び生涯が後世にまで光を放つて居るのであつて、自ら別に一の體系ある倫理學を立てた倫理學者では無いが、然しながら希臘の二つの倫理説はソクラテースを源として流れ出て居るといふことが出来る。即ち彼より教を受けたる門弟の中よりソクラテースの死後、各自の性癖好尚等によつて先師より聞いた所の教の中から最も好む一部分を割き取り、之を土臺として自己の倫理主義を建設する者があつた。而してソクラテースが門弟子に教へた倫理の教には左の三點が含まれて居つたのである。

(い) 智慧は徳の大切なる要素であること

(ろ) 自制力を以て其行爲を規正することの必要なること

(は) 人は皆快樂若くは幸福を其目的として追求すること

(い) は即ち完全(ろ) は即ち責務(は) は即ち幸福である。されば此三點は何れも

皆完全なる道徳觀には必要であつて、缺くを得べからざるものであるが、其時代若くは國民性等によつて特に其中の一つに重きを置き、寧ろ他の二つは之を輕視し閉却するのは動もすると免れ難き事である。ヒブライ人の道徳が責務を偏重し羅馬人の道徳が幸福を其特徴とし、希臘人の理想が完全であつて、其々異つた道徳的典型を爲して居るのを見ても之が判かると思ふ。されば同じくソクラテースの教を受けたる門弟子の中でも、アンチスゼニースは只だ第二の點を探て其倫理の基礎と爲し、之に反してアリスチパスは第三の點のみを高調して自己の學説を立てた。斯の如くして互に氷炭相容れざる二個の倫理説が世に行はるゝに至つたのである。

十六 快樂主義

此學派を開いたのは前に述べたる如くアリスチパスである。彼は阿非利加の北

岸キレーネの人であつたから、此學派を稱してキレーネ派と言ふのである。快樂主義は即ち情的倫理であつて、アリスチバスの唱ふる所は、人生の目的は快樂にして且かも其快樂は瞬間刹那の快樂であると言ふのである。彼等は曰く、快樂の未だ來らざる前には快樂なく、己に去れば永久に來ること無し、されば唯だ之を享受する瞬間のみが確實にして未來の瞬間は決して我々の自由になるものにあらず、故に現在を犠牲に供して未來の快樂を求むるとも、果して之が得らるゝや否や知るべからずと。斯の如く此學派は極端なる經驗主義であつて唯だ其瞬間の經驗のみを信するのである。其考によれば快樂には何の差等も無く皆同一品位のものであるが故に、唯だ最も之を感じることに激烈なるものを撰んで取ること肝要とした。而して最もこれを感じることに激烈なるものと言へば少しも智慧の爲めに攪亂せられざる純乎たる感情的快樂であることは論の無いことである。其故彼等は瞬間刹那の肉體の快樂を以て人生至高の目的とした。然し乍ら禽獸

ならばいざ知らず、人は其の性質に於て全く次の瞬間の事を考へずしては現在の瞬間の快樂を享受することの出來ぬ様に出來て居る者である。さればキレーネ派の唱へたる如き亂暴なる極端の快樂説は到底倫理説として世に成立する價値は無い。

斯の如く全然智慧を排除したる快樂説は人心に満足を與ふること能はざるを以て、其後同じ學派の中にも人生の目的は瞬間刹那の快樂にあらずして永久の快樂なることを論ずる者起り、又積極的の快樂即ち享樂よりも寧ろ苦痛に對し無感覺になることによつて到達し得らるべき心の平和、安靜が人生の目的であると言ふことを説く人も出た。而してかのエピキユラスに至つて快樂説は大なる變化を爲した。

エピキユラスの説も人生の目的が快樂幸福であると言ふ點には變りはないが、人の性質は禽獸と異なるが故に其快樂幸福も亦た全く異つて居る。即ち人間は動

物よりも其眼界廣く、其快樂の種類性質も亦た多様複雑であるが故に理性の指導が無ければ盲目なる感情のみでは其快樂を遂げ、其幸福を全ふすることの出来ぬのを看破したのである。彼はクレネ派が全く過去と未來とを無視して唯だ刹那の現在のみを重しとするの誤れることを指摘し、瞬時の快樂に代ふるに快樂の生涯を以てすべきを論じた。彼は亦た現在は過去と未來とによつて成るもので、過去と未來とを取去れば現在も亦た消滅すべき道理なるを述べ、如何にも快樂は人生の目的なれども時には之を棄て、痛苦を取るべきことあり、又更により大なる快樂を得んが爲めに現在の快樂を抛つての必要あることを説いて居る。即ち我等は目の前に來る凡ての快樂を取るにあらずして、其中より撰擇せねばならぬのである。されば瞬間の肉體的快樂よりも永續すべき精神的快樂を優るとするのである。斯の如くエピキュラス派が人生至上の善と爲す所のものは快樂であるけれども、浮世の常態として快樂は得易からざるを以て、此得難き快樂を求めて失望す

快 樂 主 義

るよりも、寧ろ痛苦から遁がる、ことを以て其主眼とする方を優れりと爲すに至り終に快樂説は厭世主義と爲り了つた。殆ど世の道樂者が其欲する如くに道樂を爲すこと能はざるに至り、失望の極、自暴自棄に陥るのと同一である。クレネ派に比すればエピキュラス派は其學説に於て非常に進歩して居ることは前述の通であるが、矢張其主眼とする所は一身の快樂幸福の外に出でず、エピキュリアンと言ふ言葉が、今日口腹の慾に耽る人の意味に用ひらるゝ位であるから、其れが決して高尚なる道徳主義で無いことは推知せらるゝと思ふ。然るに近代の快樂説は同じ學系に屬するものではあるが、大に其趣きを異にして居る。其重なる差異の點を擧げて見ると、先づ昔の快樂説は凡て厭世的であつたが今のは概ね樂天的である。其他前者の個人的、利己的なるに對して後者の社會的、愛他的なることや、數量的なるに對して品質的なる等が其の重なるものである。前に述べたる如く古代希臘の快樂主義は頗る厭世的色彩を帯びて居つたが、近

代の快樂説は概して樂天的である。即ちエピキユラス派の如きは積極的に快樂を得ることよりも、寧ろ消極的に痛苦を解脱することを以て其目的と爲すに至つたが、英國に於ける其後繼者は再び快樂主義の最初の觀念に復歸し、積極的快樂を以て人世の至上目的として居る。其代表者たるミル等の如きも、其言ふ所には多少悲哀なる厭世的聲調を帯びては居るが、世界の順次に改善進歩することを信じて之に希望を置いて居る點は昔の快樂主義と全く趣きを異にして居る。

古代の快樂説の立場は個人的にして利己主義なりしが、近代の快樂説は社會的にして人類一般に其基礎を置く様になつた。即ち其標語が「最大多數の最大幸福」であるのを見ても知らるゝのである。然し乍らバレーの如きは「自己永遠の幸福の爲めに人類一般の幸福を求めねばならぬ」とか、又は「道德の對象及び内容は人類一般の幸福であるが、其動機は自己の永久の幸福である」とか、言ふて居るのを見れば、當時の快樂説は其基礎に於ては尙ほ全く利己主義であつたと言はねば

ならぬ。

人生の至上目的を個人の幸福より人類一般の幸福に代へ、從來の利己主義を變じて愛他主義と爲したのはベンザム、ミル等所謂功利主義者の力である。エピキユラスの説に於ても肉體上の快樂よりも精神上の快樂を以て優れりとしたれば、一見已に品質的の區別を爲したるが見ゆれども、其後者を以て前者よりも優れりとするは唯だ其長く持續するのと、痛苦を來すことの妙きとの二點に外ならずして結局其快樂の量が多く且つ其時間が長い丈で優ると言ふのであつて、品質其物に於て優ると言ふのでは無い。快樂を目的とする快樂主義の見地から言へば斯の如き品質の區別は寧ろ理由の無いことであると、非難する批評者もあるが、兎に角其區別を高調したるミル等の功績は決して没することは出来ぬと思ふ。

快樂説は其長所より言へば、倫理説に於て屢々看過せられて居る點を捕へて大膽に之を述べ、人生に對して内容ある目的を供給したのは是れ乃ち快樂説の功

ある。然しながら快樂説は理論として矛盾多く、人性に關して大なる誤解を爲せるはその第一の缺點である。快樂説、功利主義は利害得失の考は與へるであらうが、道徳の基礎たる善惡正邪の明確なる標準を示すことは出来ぬ。結局其説く所は便宜と言ふことであつて責務と言ふことでは無い。是れ快樂主義が如何に改良せられても、既に其根本に於て誤つて居るから到底倫理説として人に満足を與ふることは出来ぬ。然し乍ら第十九世紀の初、英國に於て功利論者が實際問題に關して、猶ほ他の學者が徒らに舊套を墨守し、陳腐の説を唱へて居つた時、奮ふて多數人民の利益を主張し、此單純なる標準に由つて法律制度の効用を評價し、其改善進歩を促したる功績は決して之を看過してはならぬのである。

十七 嚴格主義

快樂主義と全然反對の立場よりして人生を見たのが即ち嚴格主義である。快樂

主義が情的倫理である如く、嚴格主義は智的倫理である。故に此説の主張者は人生の目的は合理的生活に在りとし、其極端の者に至ては善生涯は快樂ならず、快樂は乃ち善の反對であると言ふのである。故に嚴格主義は倫理的現實主義に對する理想主義、經驗主義に對する超越主義、功利主義に對する直覺主義である。快樂論者の貴ぶ經驗は便不便の相異は教へても、善惡正邪の區別を示すものにあらざるが故に人生の審判者は決して之を外に求むべきものにあらずして、獨り内なる理性に求めざるべからず、是れ乃ち天より理性を賦與せられて居る人類の特權であるに之を棄て、他の方法に依り、以て人生を規定せんと欲する如きは實に人性を侮辱するの甚しきものであると言ふのが嚴格論者の主張である。

特に理性を尊ぶのは希臘人本來の性質であつて、ソクラテースの教の中にも此點に重きを置いてあつたことは前に述べた通りである。而してアリスチバスの先師の教の一部分を取つて快樂説の基礎と爲した如く、アンチステニースは又其一

部分に依て、所謂犬儒主義の開祖と爲つた。彼はソクラテースが如何なる時にも平然自若として更に動かす變らざるの態度を見て感嘆已まず、是こそ即ち理想の生涯、人生の極致であると考へた。然れどもソクラテースの如くに、凡ての事に中庸を得て斯の如き完美なる生涯を送ることは、到底通常人の企て及ぶ所にあらざるを看取し、全然喜憂の外に超然たらねばならぬと信じたのである。何となれば快樂には必ず痛苦の伴ふことを免れざるが故に、寧ろ痛苦を脱する爲めに初より快樂を棄てるのが善いと言ふのである。されば犬儒派の倫理の根本主義は自然に復歸し、單純なる生活を爲して努めて其欲望を少ふするに在るのである。欲望あれば失望あり、歡樂あれば悲哀あるは人間世界の常態である。富人は其富を失ふの心配あれども貧者は其貧を喪ふの掛念は無い、故に禁慾主義を勵行し、乞食的生活を送るのが天に達する唯一の道であるとは即ち犬儒派の信仰である。犬儒の生涯を見るに皆奇矯に走り、狂態に陥らざる無きは洵に然るべき理由のあることである。

とである。

犬儒派の唱へたるが如き極端の嚴格主義が人心を満足せしむること能はざりしは、恰も快樂主義に於てキレーネ派の主張には忽にして耳を假す者が無くなつたのと同様である。而して後に起つたゼノのストア主義が大に歡迎せられたことも亦よく快樂説の歴史に似た所がある。ストア派は大體の主義に於ては、犬儒に齊しかつたが、後者の純然たる自然主義、個人主義なるに對して前者は理想主義、宇宙主義であつたのが大に進歩して居る點であつた。又此點に於てもキレーネ派とエピキュラス派との關係に大に其趣きを同ふして居るといふべきである。斯の如くストア哲學は希臘に於て起りたれど、其嚴肅なる主義は羅馬人の峻酷なる性質によく適合して居つたので、其後ストア主義が羅馬に於て著しき發展を爲し、大に勇敢なる羅馬魂を陶冶するに與かつて力があつた。又中世紀の峻嚴なる遁世的基督教もストア主義から強大なる感化を受けたことは哲人の知る所であ

る。近代に於ける嚴格主義の代表者と言へば勿論カントである。彼は稀世の大哲學者であつて、其倫理説は勿論高尚深遠であるが、その全然感情を排斥することや、其所謂絶對命令には斷じて一の例外をも許さざることなどは、嚴格主義としても餘りに極端であると非難せらるゝのも是非ないことである。パトラーの良心説を始め其後起りたる直覺論等何れも理性の尊きことを高調し、理性的存在者たる人間の價値と品位とを明かにしたる功は實に多とすべきであるが、單に其理性のみを尊んで感情を貶すの結果は偏頗なる倫理説たることを免れぬ。

快樂主義の缺點は正邪善惡の明確なる標準を與へざる點にあるが、嚴格主義の短處は人間平常の實生活を輕視する處にある。若しも嚴格主義の唱ふるが如く凡ての欲望を以て非難すべきものなりとせば、我々の日々の生活に於て愛憐、希望、恐怖等の情より自然に湧出づる一切の行爲は、皆悉く之を惡なりとして排斥せねばならぬ。人間の生涯は單に冥想靜思の生涯にあらずして、寧ろ奮闘努力の生涯

である。而して此人生奮闘の武器は之を感情の熔爐に於て作り、之を用ゆるには理性の眼を以て監視するのが必要である。善生涯は決して獨り理性のみを存して情を殺すのでは無い。唯だ其各々に所を得せしめ全き人性に圓滿なる發達を遂げしむるに在るのである。快樂主義には熱があつて光が無く、嚴格主義には其反對に光があつて熱が無い。共に斯の如き缺點があるから何れも完全なる倫理説であるとは言ふことが出来ぬ。

十八 自我實現説

正當なる倫理觀は以上述べたる二説の如くに、唯だ人性の一面にのみ偏らず、其全體に着眼して立論することが肝要である。自我實現主義は快樂主義の様に感情のみの倫理でも無ければ、亦た嚴格主義の如くに理性だけの倫理でも無い、即ち其名の示すが如くに人性全體の倫理即ち人格的倫理である。快樂説の標語は

『自我の満足』又は『自我の飽足』であり、嚴格説の其は其正反對に『自我の犠牲』若くは『自我の制服』であるが、孰れも其所謂自我なるものは感情のみの自我である。然るに自我實現説の自我は斯の如き部分的の自我にあらずして全體の自我即ち真我であつて『自我の實現』若くは『自我の充實』を以て其標語とするのである。快樂説の執れる變轉常なき經驗的自我も真我にあらず、又嚴格説の主張する智慧的思索的の自我も真我では無い。斯る部分的のものが相合して全きものを成す、是れ即ち人間の真我であり人格である。而して此真我即ち人格を有する者と言へば唯だ人間のみであるから『此人格なるものを成して人間を他の凡ての動物即ち非人格的の自我より區別するものは何であるか』との問が當然起り來るのである。人格的の自我即ち我々の真我は單に個性のみでは無い。何となれば唯だ個性を有するのみでは人間は何も他の動物と異つた所は無い。即ち自己を他の物より區別し自己の思ふ所を遂げんとする個性的の自我は人にもあれば亦た動物にもあるので

ある。然し乍ら人の天より稟けたる性は決して斯の如きものだけでは無い。人の生涯は動物の其れの如くに、支離滅裂唯だ其時限りの無意味なる部分的生涯では無くして、之を一貫する意味あり整然たる秩序あり系統ある生涯でなければならぬ。斯る意味あり秩序あり系統ある生涯を送るには動物の如くに唯だ自然の衝動力にのみ任かせて置いてはならぬ。善く之を制御し調整して、人生終極の大目的に向て進行することが肝要である。而して之を爲すには考察思索が必要であつて是れ乃ち理性の任務である。人が他の凡ての動物に異り、獨り萬物の靈長として卓出して居るのは畢竟此高貴なる性質を天より稟けて居るからである。斯の如く本能的、感情的なる個性的の自我を制御し教導して、紛々たること恰も亂麻の如くなる感情や、欲望等より秩序整然として合理的なる全き生命を織出す所の自覺が人の真我を成すのである。尙ほ詳しく言へば真我の現實は種々雑多なる欲望を、各自の行くが儘に放任して別々の満足を求めしめず、之を整理し、組

織し統一して合理的自我の全目的を達し、全生命を遂げしむるに在るのである。抑も人の理性を有するのは之に依て盲目的に發作する欲望を或は批判し或は抑制し或は其方向を轉じ、下等なる自然的、動物的自我を高尙なる合理的、人格的自我に服従せしめ、混沌として亂雜を極むる感情及び欲望を材料として秩序整然たる合理的人格を建造する爲めである。前にも言へるが如く動物の生命は單に部分的、瞬間的のものにして敢て一貫せる全體の意味を有すること無けれど、人は斯の如くに自然に湧出づる種々なる欲望によつて盲動せず、之を批判し選擇し且つ之を整理して意味ある全き生命を遂げねばならぬのである。されば人間は自主の動物にして自己の生命の主人たるのみならず、亦た自己の生命の批判者たり創造者である。混沌無秩序の中より秩序整然たる宇宙の現出したるが如く、人生も亦た混沌無秩序なる動物的生命より秩序あり意義あり一貫せる高尙なる人格の建設を見るのである。故に眞の自我實現は完全なる人格の發展であつて、人生の目的

はかのヘーゲルの『人格者たれ』の一語を以て盡すことが出来ると思ふ。子思が『天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教』と言ふたのも恐らく修身の大本は人類が天より稟けたる本性を修養練磨し、之を發展せしむるに在るの意を述べたのである。

十九 如何にして自我を實現するか

人間には自己に對し又天に對する道徳があつて、假令ロビンソン・クルソーの如くに絶海の孤島に孤獨の生活を送つて居つても、徳を建て人格を養ふの道が無いでは無からうが、元來人間の天性は社會的で、他の同性同類の人々と有機的關係を有するものであるから、眞の自我は社會的自我であつて、之を實現するのは是非とも社會に依らねばならぬことは勿論である。世に孤立單獨全く社會に關係の無い人は、實際に於てあらざるのみならず、唯だ之を想像して心に描き出す

ことさへも出来ぬのである。さればアリストートルは其政治論に於て「斯の如き者は畜生にあらざれば神ならざるべからず」と言ふて居る。即ち斯の如き者は既に己れに於て飽くまで自我を實現し得て居る者か、然らざれば本來實現すべき自我を有せざる者で無ければならぬとの意を述べたのである。

斯の如く人間が其の社會的眞我を實現するには、是非とも社會的生活に依らねばならぬのであるから、我々は社會を離れては全く道徳生活を爲すべき道が無いと言ふても不都合は無い。尙ほ詳しく言へば人間の眞我は合理的社會即ち合理的動物の集合して營む合理的生活に於て初めて實現し得らるべく、決して他人に何の關係をも有せざる孤立單獨の生活を送つて居ては眞の人格者となることは出来ぬ。されば社會は之を構成する個人との關係は恰ど四肢五體の結合して全き人體を成すのと同じく有機的であつて、その各部の生命は全體の生命であり、又全體の生命は各部の生命である。乃ち使徒パウロの言ふた様に「一の肢くるしま

ば諸の肢ともに苦み、一の肢たふとばれば諸の肢ともに喜ぶ」といふ關係にあるのである。

斯の如く社會は個人によつて成り、個人は社會によつて其生を全ふするのであつて、何も個人が自我を没却して仕舞ふのでは無い。人は各々自己の事を他人の事よりも善く知つて居るのであるから、先づ第一番に自己の足らざる所を充たして、其の性質を完ふし、専ら自己の發展を心掛くべき筈である。勿論之は自己の爲めでもあらが、亦た全體の爲めでもあるから、決して之は利己主義では無い。即ち自己を實現することによつて全體を實現し、全體を實現することによつて又た自己を實現するのである。而して個人の眞我を實現するには是非合理的世界の實現によらねばならぬ。シルレルは「人は己れ自身に於て全き物であるか、然らざれば其身を他に聯結して全き物と爲らねばならぬ」と言ふたが、ブラッドレは更に之に「汝は全き物に聯結せざれば決して全き物と爲ること能はず」と附

加へて居る。兎に角人は個人たるに止まらず、人類社會の一員となつて廣き關係を有するに非ざれば、其生涯は無意味なる斷片的のものであつて、人格の發展は決して望むことが出来ぬのである。

二十善 生涯

前に人間の目的即ち人の此世に生存する理由は「善く生きる」のである。尙ほ平たく言ふと「善生涯」を送ることであると言ふたが、今まで論じて來た所によつて大概其意味は判かるであらうと思ふ。蜀の昭烈皇帝は臨終の際、後主劉禪に遺詔を與へて「惡の小なるを以て之を爲すこと勿れ、善の小なるを以て爲さるること勿れ」と戒めて居るが、如何なる小さい事でも善は之を行ひ、如何なる小さい事でも惡は之を避けるのは、其事自らに於ても當然なるは勿論、亦た其人の品性陶冶の上に於ても甚だ肝要なることである。道德的生活の大主眼はソクラテ

善 生 活

スやアリストートルの言ふた如くに、智を磨き、徳を建て、次第に善習慣を作るに在つて、即ち眞の善人とは斯る習慣が積んで高尚なる人格を成し、其思想言行悉く宜きに適ひて殆ど惡を爲すことの出来ぬ様に成つた人を言ふのである。人間は固より萬物の靈長として當初から天より立派なる性質を稟けて生れては居るが、若し之を其儘に放任して置いて、訓練もせず、鍊磨も加へざる時には、天の賜も全く寶の持腐れとなつて、決して立派なる人格者と爲ることは出来ぬ。孟子の如きは確く人性の善なるを信じて居る人であつて、人間の心には仁義禮智の四端あるが故に、之を擴め充さは堯舜孔子の如き聖人の域に到達することも敢て難くは無いが、若し然らずして之を自然の儘に任かせて置き、徒らに食に飽き衣を暖にし、逸居して教えざる時には則ち禽獸に近しと論じて居る。

結局人間は天から其本質に於ては無限の可能性を有し、無限に發達進歩すべき性を賦與されては居るが、之はまだ何も手の加へて無い未製の原料品であるから

常に之を開発し、陶冶し、精練して立派なる人格を作り出すことが何よりも肝要で、即ち之が人間一生の仕事であり運命である。斯の如くに混沌たる動物の個性的自我を陶冶して整然たる人格的自我を成すのは却々容易の事では無い、心に銘記せられて居る天の命令を遵守して違はず、智を磨き徳を修め、立派なる人格者と爲ることを努め、日夜少しも懈つてはならぬのである。其れが即ち人間の善生涯である。果して然りとすれば善生涯は決して單に瞑想静思の消極的生涯にはあらずして、奮闘努力の積極的生涯であることは無論である。カアライルは常に好んでソフオクリーズの左の語を引用した。曰く「人間の目的は行動にして思想にあらず」と。唯だ活動にのみ重きを置いて思想を軽んずるのは勿論間違つて居る。思想は行動の泉源であつて、思想の無い行動は如何に美うても畫に描いた花の様なもので、何の生氣も無く何の價値も無い。されば思想は人間の道徳的生活の爲めに最も大切なものであることは言ふまでも無いが、併しながら如何に高尚雄大

なる思想であつても、之を行動化せざれば活ける人間の生涯には殆ど何の用も無いのである。古來世の中には唯だ思想のみを重んじて活動を輕んじ、活動の生涯を以て俗とし劣悪とし、之を貶し、瞑想静思の生涯で無ければ高尚善良なる生涯は送られぬものであるかの如くに考へて居る所の人が尠く無いから斯く述べたのである。

善生涯は斯の如く徳を修むるのである。人たる本分を盡すのである。然し徳を修むるといふのも、本分を盡すといふのも、畢竟同一の事を二様に言ふたまで、何も異つたことは無い。前者は内に在る品格を高調し、後者は行爲として其外に見はれた發現に重きを置いて言ふたのである。徳を修めざる者は其本分を盡すこ

と能はず、眞に其本分を盡す人ならば必ず有徳の人たることは勿論である。故に徳や本分は種々に區別せらるゝと雖も、結局善生涯の種々なる方面が、恰ど太陽の光線が種々なる色彩に分かたると如くに種々なる形に於て見はるゝのに過ぎぬの

である。

● 二十一 道徳的生命は發展である

然るに世の中には、斯の如く道徳の主眼とする所は自我の實現即ち人格の建造であると言ふことを以て餘りに漠然として取留が無い様に思ひ、満足せぬ人が尠く無い。斯る人は凡ての行爲に對して一々明かに之を規定すべき法則を設けねば満足せぬのである。然れども是れ畢竟道徳と法律とを混同するもので、道徳の眞の價値を知らぬからである。即ち倫理學は一々の行爲に就て精細の規則を與ふるに非らずして、寧ろ其凡てを支配すべき根本的原理と精神とを教ゆるのが其本領である。前に述べたる如くカントの倫理を以て極端なりとする一つの理由が其道徳命令に一の例外を許さず、時と場合の斟酌なく、一様に之を適用せんとするにあるのを見れば、思半に過るものがあるであらう。元來人生は實に複雑で、一見

るわで展發は命生的徳道

同一と見ゆる事も、其時により其場合により其人によつて盡く其事情を異にして居るから、豫め前以て不變不動の規則を設け置き、毎つも之を一様にあて假めんとするのは固より不可能の事である。

よし之が出来る事であると假定しても、若し斯の如くなれば人生は全く機械的のものとなつて倫理道徳は其意味を失ふに至るであらう。人間の存在中には先天的に人生の目的を包含して居るから、如何なる人でも苟も人である以上は、假令臆氣ながらも必ず人生の意義即ち其目的を意識して居る筈である。若しさうで無ければ片時も人間として世に存在することは不可能である。されば倫理學の目的は何も千遍一律、少も融通の利かぬ細則を設けて之を人に強ゆるのでは無い。乃ち斯の如く人の先天的に有つて居る此道徳的意識に光明を與へ、之を啓發して益々明かに人生の目的を曉らせ、之に向つて進ましむるに在るのである。

スベンサーの如き進化論者は下等動物の生命より研究し、生命は生物をして其

境遇に順應せしむる努力であつて、之に順應せしむるものは快感を與へて善となり、之に反するものが即ち悪である。而して道德の窮極目的は乃ち此發展を助くるに在ると説明して居る。然れども眞の順應は其目的があつて初て起るべきものである。少くとも理性的動物なる人間に於ては然らざるを得ない譯である。乃ち順應と言へば其中には「目的」更に詳しく言へば「未だ到達し得ざる目的」を含蓄して居ることは明かである。されど道德上窮極の目的に到達し得たる人は未だ殆ど無いのであるから、完全に發展した道德的生命の明瞭なる意識を形づくることは到底我々には不可能の事であるが、兎に角人生が成長發展であるとせば、我々の意識及び理想が其努力によりて次第に進歩發展し、愈々明晰を加へ来るべきは敢て疑を容れぬと思ふ。

二十二 德

人間は其天賦の性質に於て其中に發展すべき道徳生命と遵守すべき律徳的命令とを具ふるを以て、智を磨き、徳を養ひ、人格を建造して其性を遂ることが何よりも肝要であることは已に述べたる通りである。何となれば徳に進める人即ち其人格の圓滿に發展したる人は其時に應じ其場に臨んで、恰も響の聲に應ずるが如く、直に自ら其爲すべき適當の行爲を見出し得べきが故に、一々豫め其規則を設けて置く必要は無いのである。是より徳の何たるやを研究して見たいと思ふ。ソクラテースは徳は智慧であると言ひ、アリストートルは習慣であるといふ。其言ふ所は異なるが、共に眞理である。明かに善を察し、之が習ひと爲つたのが徳である。而してアリストートルは更に之を説明して「徳は熟慮的選擇の習慣」なりと言ふて居る。されば乃ち有徳の人とは其人格が圓滿に發展して、凡ての事宜きに適はざるは無き様、習慣的に善を選択するに至れる人を言ふのである。正し行爲は動もすると陥らんとする二つの正からざる行爲——過と不及——の

中間に在るを以てアリストートルは先づ第一に中庸を選択する習慣を養はねばならぬことを言ふて居る。中庸は支那の聖人も齊しく論じて居るが、彼は眞の中庸は相對的中庸であつて、其人や其時や、其處に特に適合する中庸でなければならぬことを論じて、譬へば秤器の分銅が其量る物の輕重に由て其所を異にするが如きものであつて、決して始終一定の場所に固着して動かざる形式的中庸で無い様に注意せねばならぬことを附加へて居る。孟子が子莫の中を執り乍ら、其中を執るに權なきを誦つたのは恰ど之と同一の考である。然し百發百中萬事に眞の中庸を得て誤なからんことは、獨り德に圓熟したる人格の人に於てのみ望むことが得らるゝのである。

古今東西德を説くこと取て一樣ならずして、例へば孔子は仁の一字を以てし、孟子は更に之を仁義禮智に分ち、釋迦は慈悲を以て、基督は愛を以て凡ての德を總括せんとしたが、基督の愛は又使徒パウロによつて信仰と望と愛との三つに分

けられて居る。而して人口に膾炙する最も名高いのはプラトリーの智慧、勇氣、節制及び正義の四つの主德である。アリストートルは又是よりも尙多くのものを列擧して居るが、是は寧ろ彼が特に當時のアデン人に對して期待したものであると言ふのが適當であると思ふ。

斯の如く種々に德の區別を爲せども、元來德は圓熟したる人格の種々なる方面に發現する形狀たるに過ぎざれば、其本體に於ては固より同一の物である。然るに之を互に關係なき別個獨立のものゝ如くに考ふるのは大なる誤である。又た自己に關する德と他人に對する德との二つに區別すれども、前に屢々述べたる通り個人は社會を離れて其生を遂ること能はず、社會も亦個人無くして存在せざるが故に、斯る區別は唯だ其中の何れに對して特に大なる關係ありやといふに過ぎずして、自己に關するものは固より自己のみに限るにあらず、他人に對するものも亦た自己に關係あるものなることは無論である。右の趣意によつてプラトリーの四

徳を分類して見ると、特に自己に關するものは勇氣と節制との二つであり、他人に對するものは凡て正義の中に約めることが出来ると思ふ。而して智慧が孰れもに於て必要なることは固より論ずるまでも無い。

徳の分類は前に述べたるものに止まらず、マツケンジー教授は其發達の順序よりして勇氣、忠誠、節制、思慮、公平、友情、尊敬及び智慧の七つに分つべしと言ひ、エール大學の名譽教授ラッド博士は先年東京高等商業學校に於て爲したる商業道德の講演に於て、心理學的に徳を分類し、意思、判断力、感情の三つに分ち、第一には勇氣、節制、恒心を、第二には智慧、正義、眞實を、第三には同情を包有するものとして之を取扱つて居る。されど斯の如き分類は畢竟唯だ假りに代表的のものを定めて、其他を之に包含せしめたに過ぎぬのである。且つ、徳は分割すべからざる同一人格の種々なる方面に發現する形狀たるに過ぎずして、互に相依り相助けて其の働を成すのであるから、其分類は如何様であつても別段に

徳 道 工 商

不都合なことは無いと思ふ。

ラッド氏の分類も短簡で便利ではあるが、我國に於て從來普く使われて居る智仁勇といふ言葉は詢によく徳の分類に適して居ると思ふのである。又かの智徳圓滿或は智勇兼備と言ふが如き智徳若くは智勇の區別もアリストートルが爲した様に、徳の中に智慧と固有の徳との二つあることを區別したものと思はれて頗る興味がある。余は是より此の我等の耳によく慣れて居る智、仁、勇の三つを以て凡ての徳の代表者となし、聊か論じて見やうと思ふ。

(い) 勇

意思の徳の代表者である勇は其發展の順序より言ふと、智も仁も未だ一向に進歩せぬ野蠻濠洲の時代から己に或る形狀に於て大に發達して居るのを見る。これは原始的社會に於て其の生存の爲めに最も其必要があるからであるが、人智の次

第に進み、社會の愈々複雑を加ふるに従ふて勇氣の必要は敢て減すること無く、益々之を増すことは敢て説明するまでも無い。元來勇氣とは如何なるものであるかと言へば、凡ゆる種類の恐怖と誘惑とに對する自制力であると言ふことが出来ると思ふ。而して凡ゆる動物中人間程に色々なる多くの恐怖を有する者は無い。殊に誘惑は人間の進歩するに伴ふて愈々其數と力とを増すが故に、勇氣の道徳的生活に缺くことを得ざるは明かである。然し乍ら所謂暴虎馮河死して悔なき底の蠻勇は眞の勇氣では無い。或る意味に於ては眞の勇氣は粗暴と怯懦との中間に在るとも言はるべく、是れ亦た中庸を撰擇して宜きに適ふことが肝要である。而して此撰擇を誤らぬ様にするには智慧の助によらねばならぬから、勇氣と智慧との間に甚だ密接なる關係のあることは以て知るべきである。死は鴻毛よりも軽く又た泰山よりも重し。死すべき時に死ぬるのは勇氣であるが、死すべからざる時に死ぬるのは却て卑怯であつて之を犬死と言ふ。權助が借金金の爲めに首を絞り、

放蕩息子が痴情の爲めに鐵道往生を遂げるが如きは勇氣でも何でも無い。又攝關院長兵衛や神門辰五郎の様な俠客が、死を見ること恰も歸するが如く、所謂廣橋ます目逃かざる底の勇氣も、昔こそ随分誑はれたものであつても、今日の文明世界には最早通用せぬものとなつた。

勇

曾子は孔子の大勇論を左の如くに述べて居る。曰く「自反而不縮、強ニ褐寬博ハ吾不懼焉、自反而縮、雖ニ千萬人、吾往矣」と。又孟子は富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はざるのが眞の勇氣ある大丈夫であると言ふて居るが、何れも勇氣の眞腦を穿ち得たものであると思ふ。忍び難きを忍んで股をくいつた韓信の勇も大勇であるが、チャールズ、キングスレーの次の言葉は實に味ふべきものである。「人は其同胞國民の爲めに死するより以上に何を爲し得べきや、後等の爲めに生きよ。是はより長き仕事にして、従つてより困難に又より高尚なる仕事なり」と。然れば眞の勇氣は恐怖を知らざる野豬の勇氣で

は無く、飽くまで恐怖を知つて之に打勝つ理性的動物の勇氣であらねばならぬ。曾て米國南北戦争の時、二人の兵卒は一つの砲臺を陥れんとて突進した、然るに其一人の顔色が餘りに蒼ざめて居るのを見て、他の一人が「何故汝の顔は斯の如くに蒼きか」を問ひたるに、彼は其戰友に向ひ「余は如何にも汝の言の如く恐怖して居る。然れど君にして若し余の半分丈けも恐怖したらんには夙くの前に遁出して居るならん」と答へたといふ話を聞いたことがあるが、眞の勇氣は暴虎馮河の野猪的蠻勇で無く、此兵士の如くに其恐怖を制して、而して後に得た勝利で無ければならぬ。

勇氣は斯の如く恐怖に打勝つのみならず、種々なる誘惑にも打勝つのである。斯る場合が即ち節制である。而して或る意味に於てはこの方が却て恐怖に打勝つことよりも困難である。王陽明が山中の賊を平げるのは易いが心中の賊を平げるのは六ヶ敷いと言ふたのは即ち此意味を漏したのである。節制とは人間の行動を

促す刺激力、即ち所謂「行爲の泉源」に對する自制であつて、人は他の動物よりも其性質の複雑にして高尚なる丈け、其欲望も多種多様であり、又従つて其誘惑の力も強大であるから、非常なる勇氣を以て之を制せざる時は、大なる過失に陥り遂に其身を危ふするに至るのは固より當然の事である。殊に二六時中常に其身を強大なる誘惑の中に置いて居る實業家に於て然るを見るのである。

然れども凡ての欲情は欲情その物に於ては決して悪いものではない。畢竟其度を過ごし、又は其方向を誤るから悪となるのであつて、よく之を節制し、適宜に之を用ひて行く時は雷に何の害なきのみならず、之に依て其品性を修練し、建造する力となるのである。一例を擧げて見れば、忿怒は大概の場合に於ては惡徳であるが、之とても其度を過ごし、又は其時を誤るのが悪いのであつて、忿怒其物の悪いのでは無い。怒るべき時に怒ることを知らず、何に對しても冷澹なのは死人である。朽ちたる木である。糞土の縛である。決して善人の爲すべき事では無

い。温順恭謙の化身とも言ふべき基督も、神殿を汚す者を見ては、怒心頭に發し、繩を鞭として之を追拂ふたでは無いか。嫉妬の如きは最も忌むべく避くべきものとしてあるが、是れとても或る範圍内に於ては決して惡徳にあらすして却て善徳である。夫は其妻の不身持を看過して何とも思はず、妻は其夫の放埒を是認して冷然たるといふ様なことでは、如何で家庭の神聖が保たれることが出来やうか。

商 工 道 徳

名譽及び財産の欲望も其通りで、皆人生活動の大原動力である。若し之なければ人間の高上進歩は決して望むことは出来ぬ。要は唯だ之を節制して宜きに適ひ敢て其度を過ぐすこと無からしむるにあるのである。現代文明世界の通弊と言へば、欲望の跋扈跳梁にあるから、特に此點に於て節制の徳を養ふことが肝要である。古今東西、國の衰亡に陥るのは必ず皆其人民に節制の力なく、放恣に陥るのが大原因である。國富み民奢る時は、國民の元氣衰へ道德敗れて、其國亡びざる

ものは殆ど無い。

前に述べたる所を見て、勇氣は恐怖と誘惑とに對して奮闘し、之に打勝つのであるから單に消極的のものであると思ふたら、それは大なる間違である。成程勇氣を第一とするストアの道徳や封建時代の武士の道徳には大に消極的厭世的色彩の帯びて居つたことは事實であるが、是れは唯だ其半面であつて、快活なる希望に満てる生涯は即ち勇氣を以て奮闘する生涯であることを忘れてはならぬ。十字架無ければ冠無し」と。善が最後の勝利者であることを確信して居れば、如何なる苦痛も艱難も其人には苦痛にも艱難にも非ず、却て修養練磨の好材料として悦び勇んで受くることが出来るのである。

勇

昔は勇氣は武士の獨占物であつて、町人や百姓は卑怯な者であると相場が極つて居つたが、今日の世の中に於ては實業家に勇氣の必要なることは決して昔の武士にも譲ら無くなつた。否、毎日強大多數の誘惑の中に身を投じて之に打勝たね

ばならぬ實業家には、寧ろ武士の其れに倍する勇氣を要すると言ふても差支は無
 いと思ふ。日清日露の戦役に勇武の働きを爲し、赫々たる軍功を建てて名譽ある
 勳章や年金を贏ち得た將校兵士が、却て平安の日に於て不名譽なる罪科を犯して
 之を褫奪せらるゝ者、年々千を以て算へらるゝに至り、且かも其多數が詐欺取財、
 私書偽造、竊盜若くは妄認罪であると聞くに於ては、誘惑に打勝つことは恐怖に
 打勝つことよりも一層困難では無いかと感せらるゝのである。されば眞の實業家
 の本分は、勇氣の無い卑怯者には決して行ひ得られぬことは明かである。又恐怖
 に打勝つ方の側から言ふても、今日の實業家は、平和の戦士といふ其名の如くに
 大なる勇氣を有つて居らねば何事も出来ぬのである。英米諸國が斯の如く今日隆
 盛を極めて居るのは、其政治家や學者や、海陸軍人等の力に依ることは勿論であ
 るが、主として其商工業家の勇氣、忍耐、不撓不屈の精神の結べる美果であるこ
 とは、世界に隠れのない事實である。

(ろ) 仁

朱子は仁義を説明して、「仁は心の徳、愛の理、義は心の制、事の宜き也」と言
 ふて居る。されば仁は、廣く言へば凡ての徳を包容して居るが、狹義に用ふる時
 は所謂測隱の心である。人に忍びざるの心である。即ち今日の言葉で言ふ同情で
 ある、同胞相互の愛情である。然れども仁の中には必ず義が含まれて居る。かの
 仁を以て優者の劣者に對する憐愍の如くに考ふるのは大なる誤である。元來人は
 社會的の動物であるから、仁愛は其固有の天性である。されば仁愛なくしては人
 は集團の一員としては勿論、個人としても其生存を全ふすることは出来ぬ。昔の
 經濟學者が假想した義理も無く人情も無い、利己主義一天張のエコノミック、マン
 と言ふ様な者は決して實際人間世界に居るのでは無い。孟子は揚子の利己主義を
 評して「揚子は我が爲めにするに取る、一毛を抜いて天下を利することをも爲さ

す」と言ふて居るが、斯くの如き利己主義は常に道理に叛いて居るのみならず、全然人の性質を無視したものであるから、到底實行の出来るものではない。人は自己の事を思ふと共に亦た人の事を思ふのが天性であつて、其範圍は自我の發展する程次第に擴大せらるゝのである。

實業的行爲の第一の動機が自己の利益であることは勿論であるが、今日に於てさへも、其自己と言ふのは決して他の人から隔絶孤立して居る己れ一身の小自己では無く、其家族であるか其會社であるか、或は其町村、郷里、國家であるか、其場合に於て大小廣狹の異はあるが、多少擴大せられたる大我である。されば唯だ自己一身の利益のために他人の利益を顧みざる者は、未だ其人たる天性の發達を遂げて大我に入らざる者である。聖人は人に忍びざるの心を推して、人に忍びざるの政を行ふたのであるが、實業家も亦たそれと同様に、人に忍びざるの心を推して、人に忍びざるの實業を爲すことが肝要である。道德の眼目が自我の實

現であるといふのは、之に於てもよく理解せらるゝであらうと思ふ。

(は) 智

勇を以て己れを制し、仁を以て人を待つ、是れ即ち道德的生活の骨子である。然れども若し之に智慧の光がなければ勇も真勇ならず、仁も亦た真仁ならずして過に陥らざる者は殆ど鮮いと思ふ。仁にも宋襄の仁があり、勇にも野猪の勇がある。プラトーンが智を四徳の首位に置いたのは、洵に理由のあることと思ふ。世には智徳は兩立せず、人間は智慧がある爲めに悪い事をするのであると智慧を呪ふ所の人があるが、之は大なる間違ひである。成る程小才の利く者が往々其才氣に負けて悪事を働くことのあるのは事實であらう。然し此等は眞の智慧では無くして、淺蕪な猿智慧に過ぎぬ。余は決して我國の商工業家を馬鹿だとは思はぬが、其屢大なる失策を爲し、自己は勿論國の信用にまで累を及ぼすことの多いのは

遺憾ながら其智慧が未だ本物で無いからであると言はざるを得ぬ。薬でも其効能の著しい物ほどその濫用を慎まねばならぬ通りに、智慧の使用に就ては十分なる注意を拂ひ、其濫用を戒むることが大切である。併し乍ら複雑なる人生に處し、事の是非善悪、利害得失を誤り無く裁断して行くのには、智慧に依るより外は無い。殊に前述の如く、危険の最も多き今日の實業界に立つ所の人は、一方には鳩の如くに柔和温順なると同時に、又た他の一方には蛇の如くに機敏でなければならぬ。

商 工 道 徳

廿三 實業的行動は單に手段では無い

道德の原理に就ては、必要と思ふ丈けは簡略ながら已に論じた積であるから、此から再び前に立歸り、特に商工業道德に直接の關係を有する實際の事柄に就て思ふ所を述べて見たいと思ふのである。

實業的行動は單に手段では無い

前に述べた通り、人間の行動は一つの全體であるから、其中の或る部分を以て單に他の一部分の手段たるに過ぎずとし、之を輕視すべき理由の無いことは明かである。尙ほ詳しく言へば、實業的行動だけが全然道德の圏外に置かれ、若くは假ひ其圏内に置かれても、他の行動とは全く異つた標準を以て取扱はるゝと言ふが如き事は無い筈である。然るに實際斯の如くに取扱はれて居るのには又た之を然らしむべき理由が無ければならぬと思ふ。シーガー教授が實業的行動を論ずる意味を摘譯して見れば左の如くである。

實業的行動とは其第一の目的が其行動其物にあらずして、或る間接の報酬に在る所の行動である。故に實業は或る意味に於ては、遊戯より區別されたる仕事である。然し乍ら之が爲めに必ずしも不愉快なるものであると思ふてはならぬ。其中には努力、詳しく言へば不愉快或は苦痛の或る分子を含んで居る働きと共に、活動即ち精神又は身體に愉快なる働きを含むものである。故に理性のあ

人間は其仕事を爲すに出来るだけ努力を少くする様勤めるのである。

人間の性質は衣食住を始め、有形無形の物を以て其欲求を満足するにあらざれば、其幸福は勿論其生存も出来ぬのである。されば之を得るが爲めに働くのが其第一の動機である。然し乍ら實業的行動を促す所の動機は之ればかりでは無い。其報酬を離れて其働其物に對する興味、財産に伴ふ社會的地位、名譽、權勢を得んと欲し、又は社會の爲めに盡さんと欲する心等も亦たその動機である。而して此等の補助的動機は、已に今日に於ても強大であるが、社會の進歩するに従ふて愈々強大となる、單に生計の爲めよりする第一動機は之が爲め次第に其傾分を蠶喰せらるゝ傾きである。

シーガー氏は單に事實の上に就て、人が實業的行動を執るに至る動機の説明を試みたゞけで、何にも之が爲めに實業的行動は道徳的制裁の外に在るべきものであると言ふたのでは無い。併し乍ら氏の言ふた通りに、多くの場合又た多くの入

に於ては、元來の動機が行動其物に在らずして、全く其行動の齎す結果に在るを以て、渠等にとつては爲は其目的にあらざして、單に其目的を達する爲の手段たるに過ぎず。其故動もするとかの目的は手段を義とするといふ論法で、敢て之を重大視せざるのも洵に已むを得ざることである。殊に此の第一の目的が自己の保存であるから、必要の前には法律も無く道徳も無いといふ流儀で、如何なる事を爲しても、敢て差支が無と考ふるのも、其人々の見地から言へば一理屈のあることかも知れぬ。兎に角多くの商工業家が他の行動に就ては、高尚なる理想を有し嚴重なる道徳の規則を守り乍ら、其實業的行動になると殆ど道徳を無視し、更に頓着せざるが如き事の多いのは何故であらう。ツマリ實業的行動が單に他の目的を達する手段にあらずして、其行動の中に目的を有する立派なる道徳的行動であるといふことが判からんからである。

シーガー氏は前の如く實業的行動の第一動機は生計の爲めであれど、其他にも

種々なる補助的の動機があつて、寧ろ前者は段々と勢力を減じ、後者は之に反して勢力を増す傾向であることを述べて居る。併し乍ら實業的行動を以て單に此等の目的を達するまでの手段に過ぎずと考へて居るのでは、其動機が假令社會國家の爲めに盡し度いと思ふ高尚なるものであつても、まだ本當であるとは言へぬ。金を儲けて置いて、其れから國家社會の爲めに使ふといふのが目的であれば、金を儲けることは唯だ其手段であるから、如何なる事を爲しても差支が無いと思ふのは大間違ひである。金を儲けること其事が即ち實業家の本分であつて、國家社會の爲めに其儲けた金を使ふのは是れ又た金を儲けた者の責務である。而して其大切なることに於ては兩者の間少しも差異は無いのである。繰返して言ふが、實業的行爲は單に他の目的に對する手段にあらすして、其行爲其ものに於て已に目的を有して居る。然るに唯だ之を手段とのみ心得、如何なる都合な事をしても構はぬと思ふのは大なる不量見である。斯る考が商工業家の頭に少しでも残つて居

る間は、實業道德の進歩は甚だ覺束無い。然るに斯る考が西洋に於ても日本に於ても今日猶ほ實業家の頭を支配して居るのは、洵に残念至極であると言はねばならぬ。

大分前のことであるが、かの伍廷芳氏が支那の公使として米國に駐在して居つた頃、「ウォールド」新聞の記者に左の如き米國に對しての感想を語つたことがある。

余は米國の富豪が、その金を以て國家社會の爲めに爲せる善事業を見ては驚嘆せざるを得ぬ。尙ほ詳しく言へば、斯くも多くの金持が、或は大學の爲めに、或る圖書館の爲めに、或は病院の爲めに、其他人民の教育に關する諸種の大改良と大計畫との爲めに、惜氣もなく其財を散じて居るのを見ては、實に驚嘆せざるを得ぬのである。是れ即ち彼等が隣人に對する自己の責任をよく了解せるものにて、彼等は他から如何なる非難や攻撃を被むることがあつても、兎に角

此事だけに於ては十分に社會公益の爲めに盡し居ると言はねばならぬ。人民をして偉大ならしむる唯一の方法は之を教育して高上せしむるより外に道は無いと思ふ。而して斯の如き巨額の寄附金は皆此結果を來たすべきものである。金を散ずることの難いのは之を儲けることの難いにも譲らぬと思ふ。而して此等の人々は、金を儲けることの術に於ては已に十分に之を修得し居るが、今や亦た之を最も利益ある様に散ずることの道をも見出しつゝあるのである。百萬弗と言へば如何にも大金では無いか。然るに其資産の中より斯る巨額の金を割いて世の大學に入つて高等の教育を受け、自らも忠良なる國民となり、又た同胞の爲めにも盡さんと欲する青年の爲めに、大學に寄附する人ありと思ひ見よ。斯の如き高尚なる行爲は最も深く余の腦裡に印象を與へた所のもので、余は之を米國人の性質に關して余が認め得たる最も顯著なる證據の一であると思ふて居る。

歐米諸國殊に米國の實業界に於て成功した富豪等が、社會公益の爲めに惜氣もなく其財を散ずるのは、實に伍廷芳氏と共に深く感嘆せざるを得ぬ次第である。シーガー氏も斯る人が實業界に在つて奮闘努力した當時の事は、其動機が單に儲けにあらずして、他日其儲けた金を以て大に社會國家に盡さんと欲する大望にあつたとせざれば、決して解釋することが出來ぬと言ふて居るのであるが、如何にも左様であらうと思ふ。然るに世には又皮肉な人もあつて、多くの富豪が斯の如く公益の爲めに其財を散ずる動機に疑を容れ、彼等は決して高尚純潔なる心よりして之を爲すにあらず、必ず名聞か、利益か、若くは恐怖かの爲めである。而して其多くは若し罪障消滅を願ふ菩提心にあざれば、必ず貧民の怨恨を避けんと欲する畏懼心からである。されば彼等は地獄の火を免るゝ爲め、又は貧民の亂暴を避る爲めに其の保険を付けて居るので、決して眞の國利民福を計つて居るのでは無いと酷評を下だす者もあるが、余は斯る酷評には與することを好まぬ。

然し乍ら彼等富豪が金を儲けな心も、亦た之を散じた心も共に純良潔白で、一片の私心を交へず、全く唯だ社會公益の爲めであると認容しても、矢張り其金を儲ける事即ち實業的行爲は單に其目的を達するまでの手段として、餘り重大視せなんだ痕のあるのを遺憾に思ふのである。シカゴ大學を起し、ロックフェラー、インスチテュートを設け、其他多くの慈善的事業を爲し、此點からしては人類の大恩人として仰慕せらるゝジョン、ロックフェラー氏の如きも、其スタンダード石油會社に於ける行爲を見ると頗る感心の出來ぬ事のみで、全く別人では無いかと思はるのである。ロイド氏の著書「富と國家との衝突」(Wealth Against Common-wealth)を讀んで、後半生のロックフェラー氏を見れば、如何なる感が起るであらうか。

然し是は歐米諸國の事だけでは無い。日本に於ても其通りである。近來實業界の成功者なる富豪中に、社會公益の爲め其財を散せんとする氣風が大分行はれて

來たことは何よりも結構なことである。已に學校や病院を始め、其他の種々なる慈善事業若くは社會事業の爲めに、巨額の金を出して表彰せられた人も此ごろ却々尠く無い。其人々が斯の如く金を出す動機は、皆立派なものであると善意に解釋して置くのが固より當然である。然るに眼を轉じて其人々の實業的方面に於ける行爲如何を見る時には、大に響感せざるを得ざる事が尠く無い。彼等は如何なる惡徳不善を行ふても、刑法上の罪人にさへならねば立派な實業家として世に立つことが出来るものと思ふて居るらしい。其故詐欺も行へば約束も破る。時には友人を賣ることも躊躇せぬ。虚言と賄賂とは知れぬ限りは正當である。否知れぬ様にするのが實業家の手腕であると思はれて居る。かの教科書事件でも、日糖事件でも、シーメンス事件でも、製鐵所事件でも、之に關係した人々は其心に於てはさまで疚く思ふては居るまい。恐らく自分等の行爲の悪いのでは無くて、唯だ運の悪いのであつたと思ふて居るであらう。如何に商賣は商賣であつて遊戯や慈

善では無い、出す折には出し、取る折には取るといふのが實業氣質であるとして

も、巨額の金を惜氣も無く公益の爲めに擲つ位の人、其實業的行爲になると、

殆ど別人の如く全く人情も無く廉耻も無く、悪辣極まる振舞を爲して少も憚る所

の無いのは、何か其處に理由が無ければならぬ。是れ乃ち彼等が商工業は單に金を儲ける手段であつて、何も其事自身に高尚なる目的があるので無いと思ふて居る誤解から起る結果であると言はねばならぬ。

商 工 道

シーガー氏は色々實業家の特性を擧げて居る中に、其一つは經濟的に獨立し、誰の厄介をも受けず自己の力によつて立ち、自己の好むが儘に進まんと欲するこゝとであると言ふて居るが、實に其言の如く不羈獨立は高尚なる人格を構成する一大要素であるから、唯だ此點から言ふても、實業的行動は、一方に於て或は金を儲け、或は名を揚げ、或は社會の爲めに盡しつゝ、又一方に於ては智を磨き徳を建て、人格を修練して人生の目的を達せしむるに此上なき機會を與ふるものである

ることは明かである。

廿四 實業は戦争、實業家は戦士である

商工業は平和の戦争であるとは、よく人の言ふ所であるが、實に此の二つの者の間には似て居る共通の點が多い。第一兩方ともに劇甚なる競争である。勇氣を要し、機敏を要し、先見を要し、細心を要し、果斷を要することなど殆ど皆其要件に於て一致して居る。名將は籌策を帷帳の中に運らして、勝を千里の外に決すといふが、實業家にも此技術が無くては到底成功ある商賣は出来ぬ。孫子は五事七計を説いて、未だ戦争を始めざる前に、遺漏なく勝敗の數を計算することが必要であると論じて居るが、商賣も其通りで、先づ豫め十分に其成否如何を考慮し計算してから掛らぬと、其事業が全く失敗に終るべきは必定である。又た彼が軍の妙用を説いて「其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山、難知如陰、

動如雷震」と言ひ、其虚實を論じて「水因_レ地而制_レ流、兵因_レ敵而制_レ勝、故兵無_二常勢、水無_二常形、能因_レ敵變化而取_レ勝者、謂_二之神」と言ふた如きは、直に移して之を商賣の上にも適用することが出来ると思ふ。されば戦争に兵法や軍略のある如く、商賣にも商法や商略が無ければならぬ。天の時も地の利も人の和も皆その戦争に必要なが如く、商賣にも亦た極めて必要である。武器足らず、兵糧足らず、號令行はれざる烏合の軍は、眞に潰亂敗走するが如く、規律を缺き、組織の不完全なる商工業は忽にして必ず破滅の運に陥ることを免れぬのである。右は唯だ二三の點に就て、戦争と實業との互に似て居る所を述べて見た丈けで尙ほこの他にも兩者の間には種々齊しい事が澤山にある。されど空前絶後の戦争の天才、マースの化身であるナポレオンが道破した通りに、果して「戦争に於ても道徳の力が物質の力に對して四分の三である」といふことが眞實であるとすれば、戦争と商賣とは愈々大切なる點に於て一致して居ると言はねばならぬ。

孫子自も兵は詭道であると言て居る。其所謂五事七計の多くが不道徳の事たるは何も怪むに足らぬ。されど詭道たり不道徳たる戦争に於ても、猶ほナポレオンの言の如くに、或る形に於て大に道徳の力が見はれて居るのは一見甚しい矛盾の様に見えるが決してさうで無い。戦争にも人情があり禮儀がある。是れ即ち人の心の尊い美しい閃である。其故戦争は如何なる事をして勝ちさへすれば宜いといふ譯には行かぬ。獨逸の飛行船が防禦のない市府を襲ふたり、其潜航艇が無暗に商船を撃沈して、女小兒まで殺したことは、卑怯未練な海賊行爲として世界の人々に指彈せられて居るでは無いか。

孟子の言ふたやうに、梃を制つて以て秦楚の堅甲利兵を撻たしむると言ふことは、實際文字通りには行はれんであらう。殊に今日の様に、大概機械の優劣、金力の大小に依て勝敗が決する大規模の戦争では、固より斯る呑氣な事を言ふては居られぬ。武器兵糧を始め物質上の力も、亦た前に掲げた種々なる無形の要素も

皆共に甚だ必要なることは勿論であるが、人間力の更に一層大切なることは此度の歐洲戦争が能く之を證明して居る。人間力は單に其數ばかりでは無い、質の問題である。

獨逸の兵は勇悍で死を恐れず、しかも命令に善く従ふから、名將の下に地まつて居る時は非常に強いが、是が却て敗北の原因となることが多い。且つ彼等は全然自發力に缺如して居るから、若し一人づゝバラ／＼に成つたら、存外に意氣地が無いといふことを聞いて居る。殊に獨逸の軍人が匈奴の神名を附せられる様な無慈悲極まる野蠻行爲をしたことは、獨逸の威望信用を壊はし、多年彼が辛苦慘憺して計畫したことを、空しく一朝にして水泡に歸せしむるに何れ程與かつて力があつたか知れぬ。且つ戦争も亦た凡ての有機體と齊く進化の法則に支配せらるゝものであつて、單純な昔しの戦争は唯だ大將や兵士に勇氣さへあつたらそれで勝つたのである。又た其一部分に何の位弱い處があつても、さまで重大なる關係を

全體に及ぼすことは無かつたのであるが、今日の複雑なデモクラチックな進歩した戦争では、若し其一部分に少しでも足らぬ所があると、忽ち全體が其影響を被むつて總崩れとなるのを免れぬ。此點に於ても、亦た大規模の商工業は其關係する所の範圍が頗る廣く、其組織も亦た甚だ複雑であるから、昔に於ては到底見ることの出来なんだ様な大成功が得られる代りに、少しいことから再び收拾すべからざる大失敗に陥ることが多い。或人の言ふた様に、戦争でも商工業でも、昔しは其成功は寧ろ偶然の運であつたが、今日に於ては全く科學的に間違ひの無い確實な事と成つた。

之に依ても戦争や商工業が、學術的に技術的に如何に進歩したかが知られるのである。勿論戦争にも、時には偶然に僥倖の勝利を得ることがあり、且つ一度勝利を得ると其惰力で暫く勝利ばかりが續くこともある。其通り商業に於ても案外詰らぬ平凡な人が運好く時勢の潮流に乗せられ、トン／＼拍子で大成功を博する

ことがある。而して此度の大戦争は、殊に此異常な現象を澤山社會に齎したのである。されば斯る現象を目前に見て居る者は、動もすると商賣は譯の無いもの、金錢は容易に儲かるものと考へ、徒らに一攫千金の夢ばかりを見、堅實なる正路を踏み、眞面目に汗水流して働いて居る者があれば、却て之を愚者と語り、意氣地無しと笑ふて居るのである。今日我國の社會に斯る不健全なる氣風が瀰漫して居るのは、實に我國運の爲め、又我商工業の爲めに恐るべきことであると思ふ。實業は平和の戦争であり、之に従事して居る實業家は其戦士である。既に戦争であり又た戦士である以上は、之に相應しい武士魂を具へ、常に油断なく緊張した戦争的氣分を持して居ることが大切である。

廿五 實業と戦争とは其目的が根本的に違ふ

商工業は平和の戦争であるから、實業に従事する者は常に須らく兵士の戰場に

在るが如き緊張した心を持し、毫も油断すべからざることを言ふたが、斯の如く戦争と實業とは大に似て居る點が澤山にあれど、其本來の目的に於ては兩者の間には根本的の相異があつて、互に氷炭相容れぬのである。其故若しその意味を取違へると、とんでも無い過失が出来る。商工業を戦争といふのは、畢竟その善く似て居る點を比喩へた許で、其目的に至ては兩者全く反對であることを忘れてはならぬ。厚生利用を以て本來の目的として居る建設的の商工業が、敵を滅すことを以て唯一の主眼とする破壊的の戦争と、眞に同じかるべき理由は無いことである。一方が勝てば必ず一方が負け、一方が成功すれば必ず一方が倒れるのは戦争である。然るに商工業は之に反して、自分も相手も双方共に利益を受けて喜ぶのが其常態である。純乎たる空相場が本當の商賣で無いと言ふのは、全く此理由なので、一方に寵を起して喜ぶ者があれば、必ず他の一方には、産を破り業を失ひ、一家離散して泣く者があるからである。

商工業を以て全然戦争と同一視する此根本的の誤謬から、終に其國を死地に陥れたのは、今日の獨逸が善い手本である。彼は人を縛らうと思ふて縛ふた繩で自分を縛つた。獨逸は常に政治や武力を以て世界を支配せんと欲する野心を抱きたるのみならず、商工業に於ても盡く他の競争者を倒して己れ一人の手に獨占することを計畫ろんで居つたのである。其一時占領して居つた白耳義及び佛蘭西の北部に於て、其軍隊の撤退した跡を見ると、機械や原料や其他何でも持つて行ける者は皆本國に運び去り、持去ることの出來ざる建物や土地は、殘酷にも盡く之を破壊して、水久に獨逸に對して競争することの出來ぬ様にして仕舞ふた。其亂暴の仕方が如何にも組織的で念が入つて居るのを見ると、決して唯だ軍隊が勝に乗じ、其占領地に於て行ふた一時的普通の奪掠や破壊であるとは思はれぬ。必ず深き計畫があつて、十分に考慮した上で爲した仕事であることは、毫も疑を容るべき餘地が無い。今日獨逸が天地に容るべからざる人類の敵として、神人の憎みを

受け、殆ど亡國の窮狀に陥つて居るのは、斯る處業を爲した報であると言はねばならぬ。而して獨逸人が斯る所業を爲すに至つたのは、商工業を戦争の如くに考へ、競争者を倒すことを以て目的とした其不心得が累を爲したのである。戦争前の獨逸を見ると、隆々として旭日昇天の勢で富強既に天下に冠たらんとする盛運にあつたのが、一敗地に塗みれて忽ち斯る悲境に陥つたとは、心柄とは言ひ乍ら、扱ても惜い事をしたものである。

歐洲大戰の起る少し以前であつた、匿名の一記者は英國のナショナル、レヴュー雑誌に一篇の文を寄せ、獨逸の商業が常に甚だ惡辣を極むることを論じ、種々の事實を擧げて之を證し、大に英國國民の警戒を促がしたが、其中に獨逸は世界の商權を英國より奪取らふと云ふのが目的であつて、之が爲めには殆ど手段を擇ばざることを論じ、左の如く言ふた。

獨逸と英國との間の争點は商業的優權の一語を以て之を盡すことが出来る。

獨逸の陸軍は已に久しく世界最強のものとして、歐洲大陸を支配し、四隣を震
 懾せしむるに足るのであつた。然し乍ら今日の狀態では其陸軍の優勝は英國と
 の商艦の競争には何等裨益する所が無い。獨逸の海軍は其數に於ても其効力に
 於ても、將た其設備に於ても長足の進歩を爲しては居れど、未だ英國の其れを
 凌駕するといふには至つて居らぬ。まだ暫く其時の來るのを待たねばならぬ。
 此點に於ては海陸軍人も商賣人も、獨逸人は皆其意見を同ふして居る。如何な
 る事を爲しても、獨逸の海軍を天下第一のものとなせねばならぬ。是れ即ち全國
 民の固く決心して居る帝國の發展膨脹と世界的商業の地位に達する爲めには何
 よりも急務である。苟くも英國が制海權を其手に握つて居る間は、到底此大望
 を遂ぐることは出來ぬ。獨逸の海軍は年々豫期の程度に近づきつゝあれども、
 未だ直に英國と戦ひ得るまでには至らぬ。故に目下の處は之より他の更に巧妙
 有効なる方法を以てせねばならぬ。一擧の下に北海の英國艦隊を粉碎し、英國

をして其時初て假面を脱いだ其敵の前に平伏し、其爲すが儘になるの日までは、
 如何なる手段を盡しても平和を維持せねばならぬ必要がある。其までは常に親
 交を誓ひ、阿諛諂佞、巧言令色、虫も殺さぬ風を粧ふ、是れ其狡猾なる手段であ
 る。而して始終英國の富の源泉を枯らして之を獨逸に流れ込ませ、其軍資の増
 加する逆比例に、英國の其れを減することが必要である。近き將來に於て英國
 と戦はねばならぬことは、獨逸人の皆共に信する所であるが、自分の爲めに最
 も便利な時を撰んで戦ひ度いのであるから、其様に方略を立てるのである。
 大戦争に對する其準備の完成するまで、一時平和を維持することが獨逸に取
 つては必要であるが、是は決して獨逸が世界全體の平和を欲すと言ふ意味では
 無い。鵝蚌の争は漁夫の最も利益とする所であるから、彼は巧に他の國々、殊
 に強大國の間に戦争の起る様煽動して居る。多年獨逸の外交政略は英國を自國
 以外の何國かと戦争せしむる様に釣込むことであつた。南阿戦争が獨逸の煽動

で起つたことは天下の周知する所であるが、其日露戦争を起させたのも、英國が必ず其渦中に投ずるであらうと思ふたからである。然るに其計畫の空しく失敗に歸したるを見るや、英國をして露國との戦争を避ることを得ざらしめんとて、ドツガー、バンクに於て又もや小刀細工の悪策を試みた。然し乍ら英國が毎もの如くに其術中に陥らなんだのは幸であつたと言はねばならぬ。

何故獨逸は斯る方畧を執るのであるか、其理由は明かである。即ち英國が戦争の爲めに其手を縛られ、其商業に對して十分に注意することの出来なくなつた時は、是れ即ち獨逸人に世界到る處に於て、英國の市場を奪ひて英國の商業を驅逐すべき千載一遇の好機會を與ふるものである。されば彼等はあらゆる機會を利用して、英國を自己以外の何れかの強國と戦はしめんと力めるのであつて、而して其戦争の濟んだ時分には、英國の市場は已に悉く獨逸のものとなつて、一つも残つて居るまいと信じて居る。

獨逸の商業が目的の爲めには手段を擇ばぬといふ遣方であることは右の通りであるから、下等の模造品に外國の商標を貼布したり、不正の手段を以て競争者の信用を墜させたり、賄賂を行ふたり、ダンピングをしたり、陰險なる探偵制度を用ひたりすることを、獨逸商人が最善の軍略として之を爲すに憚らなんだのは、寧ろ驚くに足らぬ。然し乍ら獨逸商業の唯一の目的は所謂世界的商業であつて、即ち獨逸軍國主義の一部を爲して居るのであるから、其對外商業に於て、斯くの如き惡辣手段を弄するのは獨逸としては、寧ろ當然であるとも言はれるのである。

然し乍ら、斯の如きことが唯だ獨逸の商業にのみ行はれて居つたのであると思ふたならば、是は又大なる間違である。鹿を逐ふ獵師は山を見ずとの諺の如く、國際商業に於ては劇烈なる戦争の爲めに、動もすると商業本來の目的を没却して仕舞ふて、道義を無視し、人道に叛いた處業を敢てするに至るのである。一例を

擧ぐれば地中海の南岸バアバリー諸國は往時有名なる海賊の巢窟であつて、各國の商船は常に渠等の爲めに脅されて居つた。當時各國の海軍は猶ほ其力微弱にして彼等を取拉ぐに足るべきものとは、獨り英國あるのみであつた。其故渠等もよく其事を知つて英國の商船だけには決して害を加へなかつた。然るに英國は其強力なる海軍を以て此等の海賊を掃蕩し、世界の商業の爲めに安全なる航路を開かねばならぬ筈であるのに、さはなく各國の商船が斯の如く海賊を恐れて自由に航海し得ざるを好機乗すべしと爲し、却て海賊に多くの補助金を與へ、他國の商業に對しては益々劫掠を逞ふせしめ、獨り地中海の貿易を壟斷したと言ふことを讀んだことがある。

實に此等は人道を無視した遣方であつて、海賊の共犯者であると言はれても仕方があるまい。又眞偽は固より保證せぬが、近頃或人の話に、或る外國の商館から日本の製造家に向て澤山の煽風機を注文した。然るに其注文には直に壞れて仕

舞ふて、役に立ずとも差支がないから、成る丈安い最下等の品をとのことであつた。固より名のある會社では斷然之を斷つたが、残念な事には小さい製造所では此注文に應じて澤山の劣等品を作つたといふことである。外國商館で何故斯る役にも立たぬ品物を澤山に注文したかといふと、何ぞ料らん、之は皆西伯利へ輸入するのであつて、日本の品物は斯の如く粗悪であると言ふことを彼地の人に知らしめ自己の製造品の販路を開く爲めの廣告であつたと聞くに至ては、實に驚かざるを得ないのである。如何にも念の入つた、又金の掛ることであつて、まさかとは意ふけれども、廣告の爲めには莫大の金を使ふて少しも惜いと思はぬ外國商人の事であるから、決して無い事だと否定することも出来ぬと思ふ。若し之が本當であつたならば、我製造家の馬鹿さ加減には、呆れ果て、開いた口が閉がらぬのであるが、外國商人の惡辣と不徳の行爲は、實に指彈すべきである。

國際的商業は上述の如く、平和の戦争どころでは無く、殆ど眞個の戦争にも超

えた激しい競争が行はれ、之に従事する人は凡ゆる罪惡を犯して憚らざるのであるが、國內商業に於ては斯くまで甚いことは少いであらうと思ふ。是は畢竟同胞國人に對するのであると言ふ感情から敵愾心が十分に起らぬからである。併ながら國際商業の本來の任務は平和の使者であつて、戦争を地球の表面より驅除するのが其天職である。然るに斯の如き貴き使命を帯ぶる商業が、却て戦争にも超えた罪惡を犯したり或は戦争を起す原因となつては實に濟まぬ事ではあるまいか。

戦前に於ける獨逸の商業の遺方が全く戰闘的であつて、敵を倒す爲めには如何なる惡辣手段をも用ふることを辭せなんだことは前に述べた通りであるが、是には聯合諸國でも困り切つて居つたものと見え、クレマンソー等ヴェルサイユの最高會議から獨逸の講和委員に交付した書中にも嚴くこの事を責め、亦た講和條約に於ても、將來獨逸が再び不法なる競争を爲して聯合諸國の商業を妨ぐることを禁せんとする趣意が明に見えて居る。而して獨逸でも商業上の不正手段が惡いと

いふ事は、已に百も承知、二百も合點であるのは、戦争前巴里に開いた列國商業會議所の委員會に出席した獨逸委員が「不法なる競争」といふことに對して、精密なる説明を下し、種々なる不法行爲を擧げて同會に提出して居るのでも解かる。

(當時英國から同會に出席したレナード氏のタイムズ紙に寄せた寄書に依る)。然るに過般開れた米國商業會議所の年會に於ては、米國人は戦後米國の強大優秀なる財力を利用して他國の商工業を蹂躪し、或は其機會を破壊せんと欲するが如き意思は毛頭も無く、却て米國の實業家は、其智慧も財力も擧げて、世界を其常態に復せしむる爲めに使用するのを以て目的とするものなるを明にしたといふことが是も亦、タイムズに載つて居る。果して事實上何處まで其決心の通りに行くか知らぬが、兎に角米國人の商工業の理想が獨逸人の其れと違ふて居ることは、之を以ても知らるゝのである。

薩澤男爵は常に「論語と十誦盤」といふことを唱道せられて居るが、之を解釋

すれば、即ち商業は孔子の教へた仁を以て行はねばならぬ。商業は先づ己が身を修めて、而して人に善を行ふのが其本旨であるとの意味であると思ふ。又或人が實業家の日に三誦すべき格言と言へば、かの「凡て人に爲られんと欲ふことは、爾曹また人にも其の如く爲よ」といふ基督の金言より外には無いと言ふたのも全く同じ心である。然るに厚生利用を以て本来の目的とする商工業が戦争となり、市場が修羅の巷と化し、競争者を倒して獨り利益を壟斷することが商工業家の本務となるに至ては、實に沙汰の限であると言はねばならぬ。

元來世界に平和を持ち來すべき筈なる商工業が激甚なる競争により、却て國と國との間、人と人との間に怨恨、憎惡の念を増さしむる道具となることは前に述べた如くであるが、商工業者が利益の爲めには、如何なる事をも敢てするといふ不埒なる行爲は、屢々眞の戦争を惹起して、世界に慘禍を興ふる原因となること

獨り渠等が無意識的に爲す所の事が戦争の原因となるのみならず、渠等は自己の商賣の爲に戦争の起ることを希望し、凡ゆる手段を用ひ種々なる運動を爲して之を挑發することにはさへ力めて居る。かの今日武器の製造を私人若くは私設会社に許すべからずといふ議論の起るのも全く此弊害を除かんと欲するからである。現に獨逸のクルツプ會社は戦争前には廣く手を延ばして歐洲各國の新聞を買收し盛んに此運動をして居つた。佛蘭西の新聞さへも二つとかはクルツプの手先となり、又常に非戦論を主張して居る獨逸社會黨の或る新聞すら買收されて居つたと聞いて居る。併ながら斯の如き事をするのは決してクルツプ會社のみでは無からう。武器製造會社や造船所は勿論のこと苟も直接又は間接に戦争に關係があつて之に依て利益すべき商賣柄の者は假令自ら進んで斯の如き運動は爲さずとも戦争が起れば敢て之を哀まざるのみか必ず嬉笑んで居る者が多からうと思ふ。何たる冷酷、無情の事である。斯の如きは或は極端な例であるかも知れんが兎に角世界

各國の商工業家の考が根本的に變化せざる限は如何に國際聯盟が立派に出來ても如何に政治家や學者が骨を折つても、世界の永久的平和は決して望むことが出來ぬと信するのである。

二十六 獨占と投機

商業の隆興して其の規模の次第に擴大するに従ひ、功名權勢の念と飽くこと無き貪慾とは愈此の戰爭的企業心を煽つて狂暴を逞ふせしめ、其の本來の目的を誤らしむるのである。即ち實業界の成功者は寵を得ては蜀を望み正當なる道に依て收めたる成功に満足せず、不法なる手段を弄して獨り利益を壟斷せんとする非望を起すに至るのである。而して現今に於て此の傾向の最も顯著なるものは歐米諸國に於て盛んに行はれて居るかのトラスト、カーテル、シンデケート等の名を以て知られ、専ら商工業の併合獨占を目的とする運動である。斯る運動の張本人は

皆必ず實業界に於ける大英物最も腕の冴えた人であるだけ、社會公衆の之が爲めに受ける損害の又實に大なることは言ふまでも無い。然るに其人々の他の方面に於ける行爲を見れば、多くは毫も批點を打つべき所のない立派な人格の紳士であるに、一たび商賣となると忽ち別人の如くになり、貪慾飽くこと無き惡魔の本相を見はし、金儲の爲めには如何なる惡辣なる手段も敢て辭せざるのを見れば、其人々の實業に關する考が根本的に間違つて居るのが此罪惡の原因であることがよく解かるであらう。

兼併の弊は商工業の隆興して其規模が擴大するに従ひ、愈甚しくなることは前に述べた通りであつて、歐米諸國殊に米國はトラストの本場として知られて居る。されば合衆國ではシャーマン法とかトラスト禁止令とかと言ふ色々の法律を設けて之を制止することを努めて居るが、却々思ふ程の結果はまだ見られぬのである。抑もトラストには二様の害がある、即ち第一は競争者を倒し其事業を獨占するに

至るまでの悪辣手段であつて、第二は其兼併の已に行はれたる後誰憚からず殆ど
 傍若無人の振舞を爲して社會公衆を苦めることである。前者に就ては實業界に於
 ける大成功者が成功の経歴を見れば殆ど血を以て書かれた罪史ならざるは無いと
 言ふ事實を以て知らるゝのである。前にも述べたスタンダード石油會社成立の歴
 史を見ても一つのトラストが成立するまでには如何に多くの悲惨事が行はれて居
 るかが解かる。

ロイド氏の書中に擧げた一つの話がある。其話によるとスタンダード會社が最
 早大概其競争者を制服して殆どその一人天下と爲つてからもまだ却々剛情で降参
 を乞はない幾多の競争者が残つて居つた。其故同社は盡く之を片付けて仕舞はぬ
 と、所謂九仞の功を一簣に缺くの憾があるので飽まで彼等をいぢめて立行けぬ様
 にすることが必要であつた。然るに其頃其近傍に在る鐵道は既に皆同社の思ふ通
 り言ふが儘になつて居つたのであるから毎月何程までかの荷物は必ず運搬さすと

いふ保證を條件として、其代りには他の會社の荷物には無法なる高率の運賃を課
 さねばならぬとの嚴命を下した。且かも斯の如く他の荷主に課した高い運賃と自
 分の拂ふ運賃との差額は之をスタンダード會社の所得として同社に納めさすこと
 をも強請した。鐵道會社は其大荷主であり大得意であるスタンダード會社の怒に
 觸れ其荷物の取扱を止められては最早立つて行くことが出来ないから、この不法
 殘忍なる條件に屈服して同社の犬鷹となり、爪牙となるより外には道が無かつた。
 さなきだに已に十分不利の地にある他の微力なる石油業者が之では如何にして長
 く其地位を維持し、同社に對して競争を續けることが出来やうか。間も無く彼等
 は兜を脱いで續々降をスタンダードの軍門に乞ひ、米國の石油業は斯の如くして
 全く同社に併合せられて其獨占に歸したといふことである。

之に類した話はまだ幾つもあるが何れも皆大同小異であるから、是よりは獨占
 事業が已に成立して後、社會公衆に及ぼす害毒に就て述べて見やう。之を逃べる

前に先づ一言して置かねばならぬことは其の事業本來の性質に於て競争を許さぬものがあることである。斯の如き自然的獨占事業は之を私人の營利的經營に任かすよりも、國家なり自治體なり公共の手を以て之を行ふのが寧ろ正當でもあり且つ有利でもあると思ふのであるが、其れは兎も角も事業其物として斯の如き獨占的性質を有するものがあるのであるから、獨占的行爲が必ずしも皆悪いと言ふことは出來ぬのである。又た假令自然的獨占事業の部類に入らぬものでも、無制限なる競争は當業者は勿論惹ては社會一般の爲めに非常なる浪費と損失とを與ふるのみならず、激烈なる競争こそは兼併の因て起る原因でもあり亦其手段としても用ひらるゝのであるから、余は決してかの競争に依て凡てを解決せんとする無干渉主義自由放任主義を謳歌するの無いは言ふまでも無い。唯だ實業家が其貴き天職を忘れ、其實業的行爲に於て全然道徳を無視して居る間は競争でも獨占でも此弊害は必ず起るべきものであることを信じて居る。

獨占の暴横は固より何の事業と限つたことでは無いが、かの自然的獨占の性質を帯びて居る事業に於て最も顯著なるのは固より當然である。トラストの本場なる米國の事に就て言へば鐵道の如きは其好個の實例を與へて居る。即ち其線路の撰擇と運賃の差別とによつて土地の盛衰と商人の活殺との權は全く鐵道重役の手中にあつたと言ふても善いのである。尙ほ詳しく言へば、鐵道會社が甲の土地を盛んにして乙の場所を衰へさせやうと思へば當然乙の地を通るべき線を廢めて之を甲の地に移すのである。又鐵道會社の最負を受けて居る荷主には殆ど無代同様の安い運賃を課し、其埋合せに悪んで居る荷主には無法なる高い運賃を課するのであつて、其結果前者の必ず成功するに反し、後者は終に倒れて仕舞うのは前に述べたスタンダード石油會社と同會社の爲めに潰された競争者との關係によつても知られるのである。米國は聯邦制度の國であつて中央政府が各州の事に干渉することが出來ぬため鐵道會社の斯る横暴を見乍ら、久く十分なる取締を爲すことが

出来なのだが、かの州際委員の設置によつて漸く取締の道が立つたのは洵に結構である。

石炭の如きも獨占には最も適した詭向きの物である。無煙炭はペンシルヴァニア州の或る地域に限られて産出するのであるが、其坑區は九つの鐵道會社及び其他二三の人の所有に係るものであつて、彼等は其價格を引揚げる目的を以て其産出額に制限を行ふことを協定し居るとの非難がある。獨逸に於ても石炭がシンチケートの爲めに非常に高くなつた例は澤山にある。例へばライン、ウエストフリア石炭シンチケートの行はれて居つた時期中には之が爲め石炭の價は前例なき騰貴を寫した。モルゲンロート博士は當時の事を記して左の如く言ふて居る。從來獨逸は世界に於て石炭の最も安い國であつて、兎に角千八百年代の末までは、英國よりも安かつたが今はシンチケートの爲めに全く其反對になり、平常の時に於てさへも英國より高い代價を拂はねばならぬことになつた」と。殊に千九百年に

商 工 道 德

獨 占 と 投 機

起つた石炭のシンチケートに對しては頗る激烈なる反對があり、帝國議會に於ても、普國議會に於ても、商業會議所に於ても、新聞雜誌に於ても共に聲を揃へて之を攻撃した。同年中北獨逸全部を通じて石炭は前例なき高價となり、一般人民は勿論工場も亦之が爲め困難に陥り、炭坑國有の聲は到處に喧しかつた、同年の末には工業は漸く衰兆を示すに至つたが、シンチケートは尙ほ石炭の値段を引揚げて止まなんだ。

獨逸に於てカーテルは色々な種類の事業に於て行はれて居るが、何れも其目的は生産を意の如くにし、其價格を左右せんと欲するのである。而して何時でも其遣方は國內の消費者に對して代價を高くし、之に依て外國市場に於て安く賣る方針であるのは流石に徹底せる獨逸式であつて、例のダンピングに於ける損失も多くは斯る軍費を以て支えらるゝのであると思ふ。

本國に於けるトラスト運動は其商工業の殆ど凡ゆる方面に涉つて行はれ頗る猖

概の勢を逞ふして居る。綿でも小麦でも肉でも酒でも機械でも皆其勢力を免れることは出来ぬ。而て最も有力辣腕の實業家が其中心となり、首脳となり萬事を抛ち腦漿を絞つてその發達完成の爲めに盡瘁して居るのであるから堪つたものではない。米國の一般人民が此等の人々の飽くこと無き貪慾の犠牲となつて苦められて居ることの一通りで無いことはよく推測せらるゝのである。

日本に於ても近來此傾向が著しく見えて來た。勿論以前から大きな會社や商人が或は其競争者を倒して之を併合し又は買占め若くは産額の制減等、惡辣なる手段に依て獨占的利益を壟斷して居ることは敢て珍しい事では無いが殊に歐洲の大戦勃發後は遽に起つた品物の拂底、物價の奔騰によつて此獨占氣質トラスト的傾向は一般人民の中にも大に彌漫して多くの人々の迷惑をも顧みず、何の品でも投機的に買占めを爲すことが社會の風潮と爲つた。米、砂糖、染料、藥品、紙等の重要貨物は言ふにも及ばず、面白半分、手當次第に何でも御座れで買占めるといふ風で

ある。而して買占める毎に必ず儲かつたのであるから愈々此勢を煽つて殆ど底止する所を知らぬといふ有様であつた。米國のトラストや獨逸のカーテルの様に組織的に出來て居るか如何かは知らぬが、戦時中に一攫千金濡手で粟の奇利を博した諸種の成金連は多くは此手段を用ひて成功した者であると思ふのである。唯だトラストやカーテルの様に資力も豊かで組織も整ふて居るものは、百戰百勝思ふ如くに價を引揚げて必ず利益を占めることが出来るのであるが、組織の無い一時的買占などは全く投機的で中ることもあれば外づれることもあると言ふ相異がある丈けである。

兎に角斯る一攫千金、濡手で粟を掴まんとする行動は壟斷主義と投機的精神との間に生れたものである。而して壟斷主義と言ひ投機的精神と言ふも深く穿鑿すると其本質は全く同一であつて、結局利己主義の極度に達したものに外ならぬ。同胞の難澁を餘處に見て買占をするのも、正當なる利益に安んぜずして投機をす

るのも其人は全く利己的精神の爲めに驅使せられて居る金銭の奴隷である。「真理は汝曹に自由を得さすべし」との言の如く此る人々を斯る奴隷の境遇より救ひ出すべき道は唯だ實業に對する彼等の誤謬を聞いて、十分に其眞の性質を知らしむるに在ることを確信する。

昨年英國政府はトラストを始め凡て商工業の併合に關する事を調査せしむる爲め委員を任命したが、此ごろ其委員の報告が世に公にせられた。即ち之が爲めの審判所を設け、若し公益を害する行爲の發見せられた時には、國家は直に之に對して適當なる處置を執るべきことを勸告し、且つ近來斯る合同の大に増加せる事實を擧げて居る。而して斯る合同が國家に及ぼす影響の甚大なるを證せんが爲め昨年米國聯邦商業委員の爲したる肉類トラスト即ち所謂「五大會社」なるものゝ活動に關する報告を引いて居る。此五大會社は此度の戰爭中一手で連合諸國に肉の供給を爲したのであるが、彼等が大に横暴を逞ふした事といへば思ふが儘に家畜

市場を動し、獨り米國のみならず世界に對してその供給を制限し肉類及び其他の食料品の價を自由に左右し、その製産者及び消費者を瞞着し、競争者を倒し鐵道會社家畜會社及び都市より特典を受け不當の利益を貪ること等であつて、千九百十七年に於ける渠等鐵詰業者の利益は戰前に比べると四倍以上の多きに及んで居ると言ふのである。併し乍ら此ごろの外國新聞を見ると此五大會社も何ふやら餘り暴利を貪り過ぎたといふ廉で處罰されたとか、されるとか言ふことである。曠る平家は久しからず、トラストの横暴もさう長く續くものでは無い、何時かは必ず凋落の秋に逢はねばならぬ。

近來物價の騰貴其極に達して、人民の生活は之が爲め愈脅威せらるゝを以て暴利者に對する怨恨憤怒の聲は世界到る處に喧しい。歐米諸國でも濠州でも皆さうであるが、伊太利の如きに於ては暴利者を極刑に處すべしとの議論さへ議會に現はれたといふことである。英國では前に言ふた調査委員の說に據つたのであらう

政府は暴利取締法を議會に提案した模様である。即ち之が爲めに審判所を設け犯罪者には二百磅以下の罰金若しくは六ヶ月の禁錮を科することが規定してある。然し此の如き取締令が果して實際に於て所期の目的を達するや否やは甚だ疑はれて居る。新聞紙は皆此法律に掛つて所刑を受くる者は比較的罪の軽い小賣商人であつて、肝心の元兇は網を破つて逃れて仕舞ひ、所謂大盗小盗を縊り、小賣商人は競争者の爲めに裁判せらるゝであらうと言ふて居る。デーリー、メイルの「倫敦だより」に次の様な一節がある。

廉賣は倫敦郊外の處々に於て行はれ、市は行商人に其假設市場を貸し其商品を賣らせて居るが、何れも直に良成績を擧げて、公衆は廉價なる食物を買ふことが出来る。一例を擧げると、通常の商店では一シルリング若しくは一シルリング二ペンスに賣る魚を市場では一斤六ペンスで、四ペンスの球菜を二ペンスで賣つて居る。其故社會の人々は商人は皆何も法外の暴利を貪るは無く極小の者

までもさうであるといふことを豫てから思ふて居つたが愈々誤つて居らななだと思ふに至つた。然るに小賣商人等は斯ることを聞いて大に憤慨し、固く之を否認して其非難は他に當るべき者があつて敢て自分等の受くべきもので無いことを主張して居る。

過日或る農業地方に於て相當盛に遣つて居るらしい果物の小賣商人が余に向て語る所は次の如くであつた。「金を儲けて居るのは唯だ生産者と卸賣商とだけで、我等は全く奴隷の如くに朝から晩まで寸暇もなく働いて居るから世間の人には必ず大金を儲けて居ると思ふであらうが、其は大變な間違ひである。我等は儲ける所では無く、却て實際損をして居る。余は前週中三ヶ月間の勘定を取立てる爲めに全く一日を費したが、此期間には三十七磅の損失をして居つた」と。何も利益の無い商賣に斯く経費をかけて遣つて行く筈は無いでは無いかと意地悪く問ひ反す人もあらうが、余は別に批評を加へず此の陳述に満足して置く積

である。併し乍ら必ず誰か國民の食物から不當の利益を繰り取つて居る者が無ければならぬ。而して之が誰であるかを見出すのは今日何よりの急務である。我國に於ても公設市場の出来てから後は、其市場の値段と小賣商人の相場とに餘りに差異があるので、世間では小賣商人が獨り品物の値段を引揚げる暴利者であるかの如く思ひ、渠等を惡み怨む者が多いが是れは寧ろ小賣商人に對して甚だ氣の毒であると思ふ。小賣商人とても全く其責を免るゝことは出来ぬが物價の騰貴は決して渠等獨りの罪では無い。假令渠等に罪があつたとしても其は比較的に小い罪であつて元兇は必ず外にあるのである。網にかゝるのは唯だ雜魚のみで吞舟の魚は却て無難に逃れるのが世の常態であると言ふても善い。加之今日小賣商人が兎角高く物を賣るのは渠等の罪と言ふよりも寧ろ産業組織の罪である。一方からは貪慾なる製産者及び卸問屋等の壓迫を受け一方からは不正直なる消費者の爲めに苦められて居る。渠等には資本が豊かで無いから安く仕入れることが出

來ざるのみか、小い商人程色々の仲間者を二重にも三重にも経ねばならぬ、且かも掛賣の爲めに借し倒れの出来ることも尠く無い。然し商人は自分で此損をすることは出来ぬから、之は正直な購買者に負擔せしむるのである。其故多くの購買者は小賣商人が拂ふた、無用の手数料や金利を拂はせらるゝのみならず、其の上不正直な購買者の借金を還したり保険料を拂つたりして居る様なものである。法外に高價なる物を買はねばならぬのは當然である。されば先づ第一に産業制度が改善せられて、小賣商人が安く其品物を仕入れることが出来る様になり、次には現金賣が一般に行はれて借し倒れが無くならねば到底小賣商人の善くなる見込みは無い。曲は小賣商人にのみあるのでは無く、購買者の側にも随分不正直な者がある。憐れな小賣商人から借り倒して置いて小賣商人の暴利を責むるなどは随分無理である。余は小賣商人に對する正義として此丈けのことは言はねばならぬ。又買占めなどは通例弊害の伴ふものであつて避けねばならぬことは前に述べた

るが如くであるが、若し其人が眞に實業家の天職を知つて己を利すると共に、又實業家として社會の爲めにも盡さんと欲する眞心から出て居る時には、單に非難すべからざるのみならず、大に賞讃と感謝に値すべきことがあると思ふ。よく人の知つて居る例で言へば、紀ノ國屋文左衛門の如きが即ち其れである。即ち文左衛門はかの有名なる本郷の大火で江戸の全市が灰燼となつた時、其火事の眞最中自分の家の焼けるのも構はず、旅装を整へて木曾に趣き、全山の材木を一手に買占めて大儲けをした。紀文が此買占に依て得た利益が相當であつたか、或は無法であつたかは勿論、其動機が何ふであつたかさへも、今から之を知るに由は無いが、義侠心のあつた彼の事であるから、江戸の市民が雨露を凌ぐべき所なく苦しんで居るのを眼前に見ながら、餘に酷い儲けはせなうと想像すべき理由がある。兎に角若し彼が機敏に立廻つて早く一手に之を買占めなんだなら、必ず後から有象無象の材木商等が無暗に競争して買煽り其結果材木の價が非常に暴騰

したことは疑ひが無い。然るに紀文は未だ斯る競争の起らぬ前に盡く之を買占め一方には自分も相當の利益を得、又一方には江戸市民をして災後直に家を建つるの便を得せしめたことは商人として天晴なる働きであると言はねばならぬ、若し今日彼の如き機敏にして男らしい商人が世に多くあつたならば、物價の暴騰も斯くまでには至つて居らぬであらう。されば獨占的行爲其物が悪いと云ふよりも寧ろ斯る行爲を爲す人が悪いのであると言ふても善いのである。

二十七 官權に依頼する弊

前にシーガー教授が實業家の特性の一つは其の「經濟的に獨立することを欲する精神」であると言ふたことを述べたが、カーネギー翁の實業家とは自己獨立の事業に従事する者であつて、如何に其報酬の額が多くとも他人より俸給を受けて働いて居る人は實業家では無いと言ふたのも、蓋し此意であらう。然るに我國の

商工業家位此點に於て缺如して居る者はあるまいと思ふ。而して其事業が大なれば大なる丈け其人に手腕があればある丈け、獨立心に乏しいのは寧ろ不思議な現象であると言はねばならぬ。今日實業界に大立物として幅を利かして居る人々も其成功の由來を洗つて見ると何れも皆依頼心の旨く當つた成功で無いのは尠いのである。されば之を見習ふ人々が依頼心を以て成功の唯一の秘訣と心得、實業家の最も大切な要件は不羈獨立の精神を没却して仕舞ふことであるかの如くに考へて居るのは實に遺憾千萬のことであると言はねばならぬ。

乍併之には深い原因がある。即ち是は久しい封建時代に實業家が素町人として輕侮せられたる結果全く其自尊心を喪失して居る處へ、維新以來政府が商工業獎勵の名の下に極端なる世話主義の政策を執つたのが、實業家に官權萬能主義の信仰を吹込み官邊の助に依らざれば何事も出來ざるものと思はしめて愈々此勢を助長したのである。御用商人といふ肩書は最早以前の様には幅が利かなく成つた

けれども萬事官邊の勢力を利用することは猶今日でも實業家の六韜三略として盛に行はれて居る。而して是れが實業家自らの根本を腐らせ、卑屈ならしむると共に大に社會に害毒を流す大泉源となるのである。賄賂も排濟も詐偽も依性最負も皆之が爲めに行はるのである。日糖事件も教科書事件もシーメンス事件も製鐵所事件も凡ての醜聞は悉く實業家が官權と結托せんとする運動から起つて居らぬものは無い。他に比類無き多くの配當をして居る堂々たる大會社までが種々なる卑劣手段を弄し澤山に費用を使つてまで猶ほ國家の保護を受けんと運動する如きは實にその獨立心の缺如して居るのに驚かざるを得ない。

元來實業家は不羈獨立の精神に富んで居るべき筈であり、又之を養ふに最も好き機會を有するものであるから、大に此に注意せねばならぬと思ふのである。明治の實業家が大概皆官邊に緣故を求め、其保護によつて成功を贏ち得ざる者は殆どない有様であるが、中には全く自己單獨の力により唯だ勉強と忍耐と機敏と正

直との結果として大なる富を成し名を揚げて居る人も全く無いでは無い。斯る人に對すると自ら尊敬と欽慕との心を起さずには居られぬのである。

斯の如く商工業家が官邊に取入り、其權力に絶つて不當の利益を得んとする弊風は唯だ藩閥政治や官僚政治の特産物の如くに思ふて居る人もあるが、それは大に間違つて居る。如何なる政治の下でも、其實業家の考が卑屈であり劣悪である間は到底此官民野合の弊風は得て除去することは出来ない。乍併世が次第に民主的となり、人民が政權に參與することが愈々多くなるに従ひ此弊風は却て愈増長する傾向があると思ふ。餘り責任を感じることに深からざる議員や政黨員を買収することは寧ろ大臣や局長を買収するよりも容易であるかも知れぬ。近來屢々起つた瀆職事件がよく此間の消息を漏して居る。されば民主的なる西洋諸國に於ても此腐敗は盛んに行はれて居るが、中にも最も民主的なる米國に於て其最も甚しきを見るのである。其州會でも市會でも今はさうでも無いが知らぬが以前には殆

ど特許の競賣所であるかの如き觀を呈して居た。不羈獨立の精神に誇つて居る米國人が此點に於ては爾かく卑屈で意氣地の無いのは、實に不思議と思はれる程である。

廿八 人の事業は天の信託である

商工業の行爲が唯だ別に他にある目的を遂げる爲めに行ふ手段に過ぎるが如く考ふるのは大なる誤であることは已に屢陳べた。其故之を賤劣なる仕事の如くに思ふのは實に理由の無いことであると言ふことも、十分に辨じて置いた積である。勞働は神聖である、苟も其事が正當で人生に必要なものならば、決して之に貴賤高下の區別のあるべき筈は無い。唯だ之を忠實に行ふと行はざるとに由て或は貴くもなり或は賤くもなり、又た善くもなり又悪くもなるのである。忠實に其職責を全ふする小使は、其地位に對し職掌に對して忠實ならざる總理大臣よりも貴

く且つ善いと言はねばならぬ。我々の地位も資産も職業も或る意味よりすれば自分の物では無く、天よりの信託である。而して天は其人の性質の適否、才力の大小等を見、其れ／＼其分に應ずる丈けのものを與へ、之を忠實に行ふことを期待して居るのであるから、我等は只管其最善を盡して天の信託に背かざらんことを努めねばならぬ。新約全書にある左の譬喩はよく此眞理を教へて居る。

天國は或人の旅行せんとして其僕をよひ、所有を彼等に預くるが如し、
 一人に金銀に從ひて或者には銀五千或者には二千或者には一千を予へおき直に旅行せり、五千の銀を受けし者は往て之を貿易し他に五千を得たり、二千を受けし者もまた他に二千を得たり、然るに一千を受けし者は往きて掘りその主の金を藏せり、歴久て後その僕等の主かへりて彼等と會計せしに、五千の銀を受けし者その他に五千の銀を携來りて主よ我に五千の銀を預けしが、他に五千の銀を儲けたりと曰ひければ、主かれに曰ひけるはあ、善かつ忠なる僕ぞ爾寡な

る事に忠なり、我なんぢに多きものを督らせん、爾の主人の歡樂に入れよ、二千の銀を受けし者きたりて、主よ我に二千の銀を預けしが、他に二千の銀を儲けたりと曰ひければ、主かれに曰ひけるはあ、善かつ忠なる僕ぞ、なんぢ寡なる事に忠なり、我なんぢに多きものを督らせん、爾の主人の歡樂に入れよ、また一千の銀を受けし者きたりて、曰ひけるは主よ爾は嚴き人にて播かざる處より獲り、ちらさいる處より歛ることは我は知る、故に我懼れてゆき主の一千の銀を地に藏し置けり、今なんぢ爾の物を得たり、その主こたへて曰ひけるは悪くかつ惰れる僕ぞ、爾わが播かざる處よりかり散さいる處より歛むることを知るか、然らば我が金を兌換舗に預置くべきなり、然らば我が歸りたるとき本と利とを受くべし、是故に彼の一千の銀を取て十千の銀ある者に予へよ、それ有てる者は予へられて尙あまりあり無有者はその有てる物をも奪るゝ也、無益なる僕を外の幽暗に逐ひやれ其處にて哀哭切齒することあらん、(馬太傳廿五章

十四節より三十節に至る

此譬喩の中には二つの眞理が示されて居る。即ち如何なる小さい事でも己が責務は必ず全心を盡し、忠實に完全に之を果さねばならぬと言ふことが其一つ、又た斯の如くに之を果せば更に、より大なる事を爲すべき機会が必ず其前に展開して來るといふのが其二つである。假令ひ小さい事でも積極的に悪を爲すのは宜くないといふ事は心ある人は皆考へるけれども、消極的に其爲すべき事を怠り又は言譯丈けに爲て置くことは左程悪い事でも無い様に思ふて居る者が尠く無い。然し苟も爲すべき價値のある事ならば十分善く之を爲すべき價値のあることは明かであるから、其最善を盡して之を爲さざる者は決して曠職の罪を免れることは出来ぬのである。マーシャル氏は次の様な意味の事を言ふて居る、「人は各極まつた長所を有て、極つた環境の中に生れ出るのであるから、大概其身分も其に依て極まるものである。左れば其人の主なる責務は其事業を有効に行ふや否やに關係

して居る。其故カーライルの汝に最も近き所の責務を行へといふたのは實に理由のあることで、如何なる仕事を爲す所の人でも其仕事を善く爲すことが第一の責務である。勿論先づ第一に其仕事の結果して貴き仕事であるか否か、又己れば之に適して居るか否かを確めることが肝要であるが、既に之を確めたる上は全心を盡して之を爲すのが人たる者の本分である」と。

ムイアヘッド氏も、亦た「職工でも藝術家でも著述家でも、其仕事に全心を盡さざる者は常に下手な職工、藝術家、著述家たるに止まらず、亦た悪き人間である」と言ひ、而してカーライルが下手な指物師に就て「彼は其槌を下す毎に之に依て神の十誠の凡てを壞つて居る」と言ふたのを引いて居る。

余は曾て米國に居つた時屢々猶太人の店に買物に行つたことがあるが、如何に僅かの買物であつても、彼等が客を粗略にせず大切に取扱ふのを見て、世界に於ける其商業上の成功の決して偶然ならざることを深く感じた。猶太人が商業上に

有する手腕は其民族の先天的の長所でもあらうが、斯の如く、如何に小さい事でも之れを粗略にせず忠實に其業務を行ふから得たる結果であると言はねばならぬ。

日本でも昔から近江商人の成功する所以は、全く此に在ると信するのである。事を爲す最上の報酬はこれに依て、それより猶より多くを爲す伎倆を得ることである」といふ言は實に眞理である。大功は細瑾を顧みずとか、尺を枉げて尋を直ふすとか言ふ様な考では、或は一時僥倖の成功を博することはあるかも知らぬが、到底永續すべき眞の成功は得られるものではない。若し秀吉が信長の草履取たりし時に、其草履取の職務を十分忠實に行はなんだなら、決して後日關白大閥たることの出来なんだのは明かである。

又た加藤嘉明がその臣某に曾て其保管を托した少許の糸を大功にして居つたのを見て之を賞し多くの祿を與へた話も人のよく知る如くである。かのカーネギー

が初て自らの働きのにより、一弗廿仙の金を儲けた時の感想を述べて「余は自分が世の中に幾許か役に立つものと爲つたから、之を得たのであると思ふと、實に言ひ盡されぬ喜びがある」と言ふて居るのを見ると、彼の成功の秘訣は全く此高潔なる精神に在つたことが解かる。又た彼の隠退後其後を襲ひだチャーレス、シユワツプも米國鋼鐵會社の社長となつてからは、帝玉にも優る巨額の俸給を取つたが、初てカーネギー會社に雇はれた折には僅に月給三十弗で職工同様の待遇を受けて居つたのである。然るにカーネギーの眼鏡によつて拔擢され、累進して遂に其後継者となるに至つたのは、固より彼が才能伎倆の非凡なる爲めであるけれども、主として彼が其地位の低い時から飽まで職務に忠實で、何事でも全心を盡して爲したことが、カーネギーの眼に留まつた結果である。何となればカーネギーは獨りシユワツプのみならず、彼が其部下の人々を登用するのには必ず此主義に據り此標準を用ひたことは其事業の幹部となり中心となり彼の片腕とな

つた人は何れも皆初め極低い地位から勤め上げた者ならざる無きを見て知らるゝのである。

事の大小に論なく、一旦自ら擇んで取つた業は天よりの信託なりと信じて、全心全力を盡し、一生懸命となつて飽まで忠實に之を行ふのは、人間の本分であると共に、其發展、従つて其成功の秘訣である。我商工業家はよく此道理を了解して常に正路を履んで、誤に陥らざらんことを望んで已まざる次第である。

廿九 粗製濫造の弊を慎めよ

商工業者が道徳を重んぜざる結果、粗製濫造の弊を來し、自己の徳性を殞し信用を失ふことは言ふに及ばず、社會公衆に損害を與へ惹いて國家の名譽威嚴をまて傷くること多きは實に慨嘆の至に堪へぬ。此點に於て獨逸と英國とを比べて見ると、獨逸は新進氣鋭の國であつた丈、其商工業の方法も頗る敏捷活潑で動も

すると保守的の英國は其市場を獨逸の爲めに蹂躪せられ、蠶食せらるゝことを免れなしたのである。獨逸の遣方は所謂「人を見て法を説け」、「郷に入つては郷に従へ」と言ふ主義で粗末な品の向く處へは如何なる粗末な品をも拵へて之を賣り、安い物を注文する者には、何程でも安い物を製造して遣るといふ風であつたから、一時世界の市場は獨逸の商品の爲めに壓倒せられんとする有様であつたが、獨逸品と言へば「安かれ悪かれ」の粗製濫造物であると言ふことは、天下周知の事實と成つて決して眞に信用があつたといふ譯では無かつた。

加之粗製濫造には必ずその附き物である偽造商標等を始め種々なる詐欺が盛んに行はれたことは獨逸製の漆器や、陶器が麗々と日本製の商標を貼付けて、世界の市場に賣出されて居つたのを見ても解かる。然るに自負心の強い英國人の遣方は全く之に反對で、獨逸の様に全然其相手の望に任かすので無く、寧ろ優劣なる英國製の品物を買はぬのは、自分の損であるぞと言はん計りの劍幕で行くのが、

其流義である。悪く言ふと傲慢で愛嬌が無く、頑固で融通が利かぬと言ふ、缺點はあるであらう。其故一時は獨逸の爲めに市場を攪され得意を奪はれても、世界の人は皆盲目で無いから、早晚其遣方が堅實で其品物が優秀であることが認められて其勢を挽回することの出来るのは明かである。而して己に戦争の前でも、大分此傾向が見えて居つた。獨逸の商工業は戦争の爲めに全く潰れて仕舞ふたが、假令戦争が無かつたにしても、獨逸が其方針を改めなしたら、必ず久からずして斯の運命に陥べきは鏡にかけて見るが如くであつた。英國品は獨逸品と違ふて其價は少し高いが、其代りに堅實であるから、安心して買ふことが出来るのみならず、長い間の事を考へると却て得であるといふことは、已に天下の人々に認められて居るでは無いか、羅紗でもフランネルでも英國品は其價の高きに係はらず、獨逸製を壓倒して居る。且つ英國商工業者の感心なことは、どんな品物でも、其量や尺を必ず餘る程十分にして居ることであつて、日本人は此點に於ては實に彼等

に對して恥入らねばならぬと思ふ。

我國の商工業家も近來は大分眼を覺して、最早昔の様な亂暴な事をせぬ様になつたとは言ふものの、まだ却々安心が出来ぬと思ふ。戦争中露西亞へ送つた靴の中にはボールの底で胡麻化した物があつたとか、中央に心の入つてゐない、鉛筆や銃くらで何れ程、研いでも切れぬナイフを輸出したとか言ふ様なことは、假し全く跡形も無い捏造の言であるとしても煙のある處には必ず火のある道理で随分如何はしい品物を賣つて平氣で居る商工業者が尙ほ尠く無いことは、争はれぬ事實である。南洋の某處に店を出して居る友人の話に此度の大戦の勃發以來歐洲から其品物が來なくなつたので、今は日本品の獨舞臺になつて居るが、畢竟無しでは居られぬから、暫く粗悪な日本品で辛抱して居ると言ふ丈のことであるので、決して日本品に満足して居る譯では無い。其故一旦戦争が濟んで歐洲の商工業が以前の狀態に復した曉には土人が十分其味に慣れたビールやその他僅かの食料品

を除いては他の日本商品の販路が、或は全く止まつて仕舞いはすまいかと心配する。若し我實業家が今日に於て大に目を覺し、十分に其覺悟をせぬと非常なる打撃を受けて、窮地に陥るのは鏡に懸けて見ることが如く明かであると言ふたが、其他多くの人から聞く話を総合して見ると、實に其通りであつて甚だ心配に堪へぬ。

三十 人眞似は實業家の本分では無い

日本人は模倣の才には長じて居るが、獨創の力には缺如して居るとは屢々耳にする所の言であるが、他の事は兎に角に商工業に於ては遺憾ながら、此言の誣ひざることを認めねばならぬ。或人が大なる事業を成すの道は世の要求する所を見出して之を充たすに在ると言ふたが、是こそ商工業家の着服すべき最も大切な點であると思ふ。商工業家が社會の爲めに必要なものも、亦た彼等が社會に於て眞の成功を博するものも、全く社會の爲めに最も必要になると、同時に又た自己の爲

めにも最も利益ある事業を選ぶからである。然るに今日の實業家を見ると商と言はず工と言はず、滔々として皆只他人が成功の後を追ふて之を模倣し、之に依て己も亦た成功を收めんとして居るのである。其故多くの場合に於ては結局眞に成功する者は一人も無く、盡く共倒れと爲つて仕舞ふのが、關の山である。實に斯の如き人には獨立の思想も、確乎たる信念も、何にも無い、と言はねばならぬ。其故始終商賣換のみをして落着かず「浮草やけふは向ふの岸に咲く」の有様で言はゞ實業界に於ける浮浪の徒である。火事場泥棒である。或は偶に僥倖の成功に打的てることはあるかも知れぬが、商工業家としての本分を盡し、其人格を磨くことなどは思ひも寄らぬことである。

これは實業家では無いが、大に實業家の爲めに参考になると思ふことがあるから話して見やう。有名な前野蘭化(良澤)先生は幼くして恃恃を喪ひ、外舅淀藩の醫員宮内全澤の許で成長したのであるが、全澤曾て良澤を諭し、凡そ男兒たる者は

人の未だ爲さざる所を爲して、一世に卒先すべきである。又た衆人の棄る所の業を修め之を後世に存せんことを謀らねばならぬ。而して断然志を決するには先づ書を読み道を知り、其向ふ所を定むることが肝要であるとの言を以てした。蘭化先生はよく其祖父の教を遵守し、人の未だ爲さざる所又衆人の棄る所の業を修めて、日本文明の卒先者となり、大に國家の爲めに益し又た己れの名をも揚げたのである。何にも殊更奇を街ふて物好きに人の爲さぬ事をするのが善いと言ふのは無いが、或人の言ふた様に社會に於ける實業家の任務は蜜蜂の其れであつて、人の未だ氣の付かぬ利源を採出して之を採取すること猶ほ蜜蜂の花から蜜を探るが如くならねばならぬ。

然るに自己には何の創見も無く、何の信念も無く、唯だ他人の成功を見て羨み其精粕を嘗めて僥倖の利益を得んと欲する如き者は、決して眞の商工業家たる資格を有するとは言ふことが出来ぬ。他人が一度成功したからとて、我も其後を辿

らば成功すると言ふ理由は決して無い。柳の下には何時も鱒が居ると思ふのは間違ひである。加之實業家が其實業に由て其智識を磨き、其人格を養成せねばならぬことは、學者が其學門により、政治家が其政治によつて之を爲すのと同いであることを忘れてはならぬ。故に其人自らの爲めから言ふても、亦た社會國家の利益といふ點から見ても、日本の實業家は單に人眞似を爲す事を以て満足せず、大に其獨創力を發揮するの必要があると信するのである。

三十一 英國實業界の暗黒面

英國は世界に於て其商業道徳の高いことを以て聞えて居る國であるに拘はらず、まだ却々理想通りには行つて居らぬものと見え、ジエームス、アツダレー氏は此點に就て次の様に論じて居る。實業家の爲めに善き教訓であると思ふから、少し長いが其大意丈けを抄録して見やう。

サア、エドワード、フライは最も正直な人で、決して奇激の言を弄して人を驚かす様な人ではないが、其隠退の後には専ら商業界の事實を研究し、之に關する悪き習慣を暴露する事に力を盡して居る。而して「賣買の間に附着する罪惡」と題せる氏の小冊子の中には左の如きことがある。「我等は我等の周囲を見、商業界の道徳に關して、多く満足すべき事の見出し得られざるを深く憾とする。勿論我等は其中には最も正直なる最も道徳の純潔なる人の尠からざることを知つて居る。然れども凡て之に拘はらず、他の一方には甚しき暗黒の一面がある。即ち株式取引所の取引によつて賭博心の隆興を來たし、之が爲めには以前に幸福なりし家庭が破壊せられ、船舶に過當の保險を附して、無幸の人命を喪はしむる結果を來たし、スウエツチングの惡風が大都會の眞中で、多くの工業に於て盛んに行はれ、商品を実質以上に見ゆる様にせんとて、常に辛苦を爲し、多くの商工業家は自分よりも、より名高き若くはより成功せる競争者の商標を偽造

して其品物を賣り、而して殆ど凡ゆる商業に於て賄賂と瀆職の行はれざるは無きを見る。」

又たフライ氏は秘密に行はるゝコンミッションの事に論及して「苟も良心のある人の爲すに忍びざる商賣がある。世には下役の者に贈賄せざれば決して、新しい品物を賣ることの出來ぬ人があることを確知す」と言ふた。

新聞紙中最も温和なるタイムスは千八百七十七年七月三日の社説に於て、商業道徳の弛廢に就て論じ、次の言を爲した。「一言すれば遂には全然正直なる商業取引を絶滅せんとする恐れあるまでに發達したる、此疾病は殆ど凡ゆる方面に蔓延して底止する所を知らぬ」と。又た「何處を見ても多少道徳の弛廢と商業方法の腐敗とを證明すべき罪惡(賄賂)の痕跡を見出すであらう」と。

其から十九年を経、千八百九十六年九月廿六日の同紙は復た「秘密のコンミッション」といふ題を以て「誰も此等の事實を否認する者はあるまい。若し其

が暴露したる時は、之に依て出来た取引は當然無効に歸すべき秘密なるコンミッションの授受は、全然、正直なる商業と兩立すべきもので無いことは明白である」と論じた。

故カノン、リットルトンも亦「商工業の罪」と題する小冊子に於て不法なる近代の商業を攻撃して少も寛假せなんだ。其一節を挙げると次の様な言がある「禽獸社會の法則は食らへ食はれであるが、これと齊しく今日の商工社會の法則は騙ませ騙まされであると言ふことが出来ると言ふた人がある。如何にも今日の如くに何等道徳的制限なく、激甚なる競争に任かして置く制度は、殆ど商業的食人主義の制度である。而して其敵と同一の武器を用ゆるか、若し然らば打負かされて食らはれるか、二者其一を擇ぶの外は無い」。多くの人々は、實業界に於て欺詐的行爲を爲す者は唯だ其下級の者のみに限るが如く思ふて居るが是は大なる間違であつて、上流の人々こそ其惡事を働くことに於て却て一

層大なるのである。概して言へば俵や噸で商賣する人は尺や斤で商賣する者と其道徳に於ては何等の差も無い。少し計の詐欺から、唯だ手を人の懐に入れて物を取らぬといふまでなる窃盜に至る凡ゆる程度、凡ゆる種類の不法行爲は我商業界の上層に於て見られるのである。無数の詐欺、巧妙なる詭策は天下に流行し、その多くは商業の習慣として確立せられた。否獨り確立せられたのみに非らず大に辨護せられて居る。

次には新聞紙に載つて居る寄書である。斯る新聞の寄書殊に匿名のものは信用するに足らぬものが多いけれども、此事に關係したものは大概さうで無い。而して何れも主として商業に於ける凡ゆる種類の詐偽々瞞を暴露して居るのである。

先づ第一には魚鳥類の商賣に關する二つの寄書であつたが、誰もこれを辨駁した者は無かつた様である。「魚屋の隠居」と言ふ匿名の寄書には「若し諸君が

料理店に行つてソールのひれ肉を注文するならば、十の九まではフィッチ
Whitchを以て胡麻化さるゝことは必定である。後者は前者の代價の凡そ七分一
位のものである。又ひれ肉で無いソールを命じたら、必ず鯨か雷公魚の尻尾の
端を食はさるゝことは請合である。其原價は驚く勿れハンドレットウエイト
(百十二斤)に就て、八志乃至十二志である。而して倫敦が世界に冠たる鯨魚
の大市場であることは、之に依て暗示せらるると言ふて居る。又小さいハドック
(Haddock)をフィッチング(Whiting)として賣り、一斤に付き四片も安い諾威鮭
を蘇格蘭物と偽り、西班牙産のソールを英國産と胡麻化し、諾威製の燻製を英
國製と欺くことなどは朝飯前の事であると言ふて居る。

第二の寄書家も「魚商」といふ匿名を用ひて居るが、彼は先づ第一に自分は
天下の人から劫奪するか、若し然らざれば其職業を失ふの破目に陥つたと言
ふた。彼は二百斤のソールを二百五十斤に胡麻化さねばならなんだ。若し氣の

利かの料理人が其目方を秤るのであつたら、五分か一割のコミッションを之
に賂したのである。彼は匈牙利産或は伊太利産の七面鳥を英國産とし、一打凡
そ六志の漳州の冷蔵兎を一頭一志四片なる英國兎とし、一斤七片乃至十片の冷
藏鮭を蘇國産或は英國産なりとし、百に付き五志の佛蘭西蠟を、一打三志若く
は四志の本國産として賣らねばならなんだことを述べ、終に左の如く言ふた。
得意が買はない物を帳面に付けよと命せらるゝに及んで、今は去るべき時であ
ると思ふて断然辭職した。

其次は食料品に關する商賣である。年來一志八片の茶を用ひて居つた人があ
つたが、彼は茶の税が減つたから、是からは必ず安い茶が飲まれると喜んで居
つた。然るに其人は前と少も變りの無い茶に同じ代價を拂はせらるゝから、不
思議に思ふて質して見ると、商人は以前と同じ物品が今手許に無いので、前
には一志十片で賣つて居つた上等の茶を差上げてあると如才の無いことを言

ふて胡麻化した。或る食料店の番頭の話では、彼は同じバタを大きな桶から出して其半分には一志、他の半分には一志四片の札を貼ることを命ぜられたと。又彼の言ふ所によると同一の乾葡萄に三つの異つた直段を付て賣つて居つたと。田舎の金持なる食料商に使はれて居つた一人の手代は一斤一志のバタの注文に對して商標の無い人造バタを賣つて居つたことを白状し、彼は斯る事を爲すに忍びなんだので、遂に其の店から暇を取つたさうである。又「支配人」といふ匿名の人は、一志のバタや砂糖には價を二様にし、茶には出來得べくば三様にせねばならぬ、是れは其帳簿上の計算を利益ある様にするには已むを得ざることであると言ふて居る。

海員よりの書狀を讀んでは、誰も實に其事の容易ならざるに驚かぬ者はあるまい。其一つには「若し諸君にして商船の士官に彼等が其地位を失はざらんが爲めに、航海日記の中に虚偽の事を書かねばならぬ事情を白状せしめたなら

ば、世上の人心は「之が爲めに如何に動搖することであらう」とある。又其一人の言ふ所によると「余は船主の爲めに澤山の虚偽を語り、船の積載力を實際以上に證言し、不幸なる下等船員の食料を胡麻化し、至つて平靜なる海を航海して居るのに、非常なる暴風雨に逢ふた様な記事を航海日記に書込まねばならぬ。これが保險會社に向て、保險料を請求する材料となるのである。三年前に余は自分が虚偽を言ふ丈けで無く、余が部下の者二三人に此虚偽に證明することを強制する様要求せられたるを以て、之を拒絶したるに直に免職となつた」と。吳服商及び其他に向つても随分激烈な非難攻撃があるけれども、此等の寄書に依て見ると斯る弊害が決して一般的で無いことの知られるのは、まだしも喜ばしいことである。然し乍ら幾多の悪事が斯る商店に於て行はれて居ることは蔽ふべからざる事實である。

「四十年來の實業家」といふ名を以て莫大小商の内幕を明かした人がある。彼

は不正なる手段が廣く行はれて居るが爲め正直に營業することの殆ど不可能なるを論じ、種々なる事實を擧げて詐偽の善く行はれて居る事を證明して居る。商店に雇はれて居る人々の書状から二三を擧ぐれば「私は私の會社に入るや否や直に若し虚言を吐はざれば、餓死せねばならぬことを發見した」私は毎日虚言を吐ふて居る。若し時々起る不正直な事に二の足を踏む様なことがあれば、私の主人は直に私を放逐するのは明かである」等の言がある。

牛乳業も亦た攻撃の焦點となる一つである。「二十年來の牛乳商」と名乗れる一人は「余は牛乳業の如くに虚言と詐偽との行はるゝ商賣は他にあるまいと思ふと言ひ、又「牛乳商」と稱する人は「一番に多く虚言を吐ねばならぬ商賣は牛乳の小賣業である。新しい乳と浮渣とを混言することが必要である。八カアトに對して九カアトの勘定をせねばならぬから、凡ての得意に其れ丈枘目を減らしで賣らざるを得ぬ。若しさうせざる時には其差額は自分が負擔せねばならぬ」

と。然し此寄書に對しては全然其事實にあらざることを辨駁した搾乳所の支配人が一人をつた。

其他新聞紙上に載つて居つたものを言へば、鋼鐵商賣に於ては海陸軍省に納める保證附最上鋼鐵は其實瑞西製のベセミア鐵であつて、本物に比べると半分の値段であるとの噂がある。種物商の内幕を聞くと、同じ袋の中から五六種異つた物が出來、華客によつて同じ種に色々の名を附け、又た已に四年も經つて何の役にも立ぬ種を混合し、最新の物と銘打つて賣るのである。一人の手代は餘り正直過ぎるといふ理由で其店から解雇された。

家具商賣に於ては生材を使ふた物を乾燥したものだと思ひ、外國出來を以て英國製なりと胡麻化すが如きことは、敢て珍らしいことで無い、使用人は種々なる悪辣手段を以て儲けねばならぬ。然らずば豫め他に善い口を見附けて置くべき必要がある。

肉類に關して一人の肉屋の言ふ所によると、購買者は秤を胡麻化さるゝこと多く、實際四斤半の羊肉を六斤にして、之を三志に賣ることは極めて容易であるとの話である。以上は只だ新聞紙上に散見して居るものに就て、其梗概を述べたのに過ぎぬが、是から少しく余が個人的に知り得た所の事を書いて見やうと思ふ。

骨董品の掘出物を爲さんと探し廻て居る貴婦人等は人に虚偽を言ふべき誘惑を興ふることが尠く無い。若し貴殿が真正直に是は古い物では無い、只だ模造した物であると言ふたら、斯る婦人は直に貴殿の店を出で、同一の品物を彼に示して百二十年前の製作であると言ふ處へ行つて、之を買ふであらう。斯る事は毎日家具、書畫、掛布等の商賣に於て行はるゝ所であるが、其場合には大概店の主人は出で來らずして賣子が之を賣ねばならぬのである。下等品を胡麻化して高く賣る者は氣の利いた人と稱せられて、段々と重用せらるゝが、正直な人

は直にお拂箱となる覺悟をして居らねばならぬ状態である。鐵及黃銅の鑄造を職業とする某は余に書を寄せて「商賣とは單に泥棒の別名に過ぎぬ。余は終に實業家たり、又た之と同時にクリスチャンたることは、絶對的に不可能であるといふ議論に達した」と。

小賣業を營む一の大會社は次の如き方法を以て營業をするのである。(其品物の何であるかは姑く差控へて置く) 其競争者が十六志六片で之を賣るのを見ると、直に其サムブルを買ひ之を製造家の許に携へ行き、十二志六片で賣ることの出来る様に拵らゆべき條件を以て一千磅の品物を注文した。

次の注意は或店の會計方を勤めて居る者から、一人の華客に與へたものである。「決して店員に貴殿の買はんと欲する値段を言ふてはならぬ。若し此用心が無いと酷い目に逢はされることは必定である」假令一錢の物でも毎つも必ず何か買はるゝことが大切である。何故と云へば若し何も賣れざる時には店員は罰

金を取られるからである」と。此人の知つて居る一の會社では百七十五度其店員から罰金を取つたことが其帳簿に載つて居り又其實銀の過半が罰金として引去られたが爲めに、其支拂を受くべき土曜日の晩に泣いて居つた少女が幾人もあつたとのことである。

食料品に關する詐欺に就ては澤山に聞いたが、余は寧ろその一般的ならざるを信せんとするのである。兎に角信用ある會社商店では最早大分行はれなくなつたと思はれる。然し此に廣告的な茶會社の一例がある、同會社では原價九片四分の一の茶を二志八片で賣つて居るのみならず、陶器工場から環瑾のある陶器を買ひ其中に少量の茶を入れて荷造し、其荷の着いた時に籠の中の陶器の破片を證據として、鐵道會社に損害を拂はした。同會社は此る手段を以て無法の利益を得たことは勿論である。讀者は之を讀んで笑ひ、それは誇張であつて又た異例であると言ふであらう。成程異例であらう。然し肝要な點は次の事であ

る。何處でも地位を得ることは非常に六ヶ敷い。而して善良なる青年が之が爲め寧ろ喜んで斯の如き會社に使用されるのである。渠等は詐偽の毒瓦斯の中に身を投するのである。渠等は如何に爲べきであるか。裕かなる人には「渠等に其處を止させよ」と言ふことは容易である。

今一つの食料品の詐偽を言ふと、醋は純粹の物を賣つても非常に利益があるのに、尙之に水を混合することが行はれて居る。

同じ茶に二様の値段を附け、又た米國産の鹽豚がベーコンとして賣られるのである。余は無邪氣にウイルトシャー、ベーコンがウイルトシャーで出来たのだと思ふて笑はれたことがある。然し後で思へば、時には其がシカゴから來るといふ話を聞いたことがあつたのである。今一つは人造バターであるが、其良人が人造バターを好かぬからとて、食料商に之をバターとして賣らせる婦人のあることを聞いた。今は良人の怒を豫防する爲め之を包むに特別の穴明き紙さへ出來て居

るといふことである。

容易ならざる詐偽と言へば、鐵道會社に托する貨物の重量に就て、虚偽の申立をすることである。最も立派な會社が之を爲すので鐵道の方でも、今は非常に嚴重に注意して居る。而して此詐偽の爲めに鐵道の被むる損害は莫大で、時には五割以上に及ぶことがあるといふ。

最早場處が無いから、只だ安時計や怪い繪畫や、如何はしい壁紙やなどの頗る疑はしい廣告を始め、華客から返された物を特別に上等であるとか、安いとか言ふて廣告すること、又は下等の英國バタを混合したる丁抹バタがあること位に止めて置く。

以上の非難攻撃に對しては、其當業者は全然之を否認せんとする傾向であるが、中には實業界に於ては多くの詐偽々囁の行はるゝことを認め乍ら、是れ全く激烈なる競争の結果であつて、不幸なる商工業者には他に取るべき道の無

いことを白狀して居る者も尠く無い。

兎に角斯くの如く激烈なる非難攻撃のあるに拘はらず、之に答辨する者の甚だ尠いのは實に不思議であると言はねばならぬ。勿論多くの實業家は眞に之に對して答辨することが六ヶ敷くはあるまいが、斯く出來ぬ人も亦た尠くあるまいと思ふ。

誰人も皆共に力を協せて、商工業に斯る詐偽を不可能ならしむる様に努力せねばならぬ。我等は此等の事に本當の名を付けて見やう。混合をする事は人殺であり、量や尺を減らすことは泥棒である。華主は同胞であり、實業の改善に努力する道德家は世に平和を齎らす人であると言ふても宜いと思ふ。

以上記載した様な事は不幸にして、日本に於ては少しも珍らしい事では無い、事朝飯前の事であるといふても善い位である。我々はうつかりとして居ると泥籠と思ふて蝦蟇を食はされたり、犬肉の焼鳥や、馬肉のビステキなどの御馳走にな

ることなどもある。其れ故余は一方に於ては英國にも斯る事の猶ほ行はれて居るのを見て、實業道徳の甚だ難きことを知ると同時に、又他の一方に於ては斯る事までも斯くまで、八ヶ間敷く騒ぎ立てる英國は流石に實業道徳の標準が高いと感ぜざるを得ないのである。若し是が日本であつたら、誰も實際已むを得ざる事否寧ろ當然の事として、看過して仕舞ふであらう。

三十二 正直は最後の勝者である

前に擧げた多くの人々の告白を見るに、全然其商賣に不正の行はれて居ることを否認する者は別にして、其事實を承認する人は皆異口同音に今日の實業界の狀態では、斯の如きは洵に已むを得ることであると言ふのである。更に詳しく言ふと何分競争が餘り激甚で、餘り廣く不正が行はれて居るから、自分一人が如何に心を惱め骨を折つても、正直一遍で世渡をすることは到底出来ぬと言ふのに皆一

致する様である。是は或る度まで眞理であるに相違無い。ハアリー、ブラット、ジャドソン氏が其友人の實驗談であるとして、次の事を書いて居る。其人は數年前に純粹なる香料の商賣を始めやうと云ふ考を起した。それは彼が多年食料品を商ひ、殆ど凡ての香料が劣悪なる混合物であることを善く知つて居つたから、若し唯だ純粹の香料のみを賣る店が出来て、其處ならば安心して最良の品が得らるゝといふことが分かつたならば必ず多くの華客を惹き付け、商賣は大繁昌を爲すであらうと窺ひに信じて居つたのである。

然るに愈々商品を仕入れ店を開いて見ると、全く豫想せなんだ事が起つて其目的はガラリト外づれて仕舞ふた。即ち誰も純粹な香料を買う人が無いのである。純粹な香料が劣等の混合物よりも高價であるのは勿論であるが、從來唯だ混合物のみを使用して、久く其味に慣れて居る人々には純粹な優良品の價値が一向解からぬからである。兎に角賣れぬ品物を積んで置くのは商賣にならぬから、其人は

間も無く店を閉ぢねばならぬ不幸に陥つたといふことである。かういふ例は日本にも澤山にあつて、餘り正直であつては商賣は出来ぬといふのが、今日殆ど實業界の通語になつて居る位である。併ながら果して是が全般の眞理であらうか。詐偽瞞着が其人々の考ふるが如くに、成功の必要條件であつて、正直は只だ偽善に過ぎぬのであるか。

楯には両面がある。何事でも唯だ一方ばかりを見ては間違が起る。如何に金があり智慧があり、腕が冴えて居つても、信用が無ければ、商賣人は恰ど武器を有たぬ兵士の如き者であつて、何事も出来るもので無い。即ち現今の商賣は信用が生命であつて、實業家の信用は其資本の大部分を成して居るのである。如何に資本の少い商人でも其信用が堅固でさへあれば、彼を後援する者は澤山に出来るから、ドンナ大きな商賣をしてドンナ大きな儲をすることも自由である。然し乍ら斯の如き信用は飽くまで其人が正直で、片言隻語も虚言を言はず、約束した事は

寸分も違へず必ず履行する人で無ければ得られぬことは勿論である。若し其の人が嚴重に此主義を守る人で無いと思ふたならば、銀行家も資本家も段々其の人を見るに疑ひの眼を以てする様になり、終には確實なる擔保が無ければ、一文半銭の融通をもして呉れなくなることは明かである。

羅馬は一日にして建てられず。斯の如き信用を得るには多くの時日を費し多くの實證を示すことが必要である。斯の如き信用は大概長い間常に變らず正直一遍で通して居るのを徐々に世間の人が認むるに至つた結果である。然し信用を築くのは家を建てるのと同じであつて、建てるには時間がかかるが、之を壊すには骨が折れぬ。或人の言ふた通り人が信用を得るのは消極的の證據に依るので、彼は今まで決して約束を破らず、又た悪い事をしたことが無いから、將來とてもさうであらうと言ふので信用せらるゝに至つたのである。斯る心證を人と與ふるまでには實に容易ならざる苦辛と犠牲とが必要であるのは言ふまでも無い。然る

に斯くの如く苦辛と犠牲とによつて得た信用もたゞ一つの積極的の行爲を以て破壊して仕舞ふのである。

商 工 業

如斯きは所謂九俣の功を一簣に缺くものにして、積年の苦辛も空しく水泡に歸すのみか、これぞ終に其人の本性を見はしたので、今までののは全く偽善であると排斥せらるゝに至るのである。不正悪辣の行爲は一時其功を成すかも知れぬが、世の中の人が皆盲目で無い限りは、何時かは見露はされて結局醜態を演じ大損をすることは必定である。シカゴの有名な商人は數年間に亘つて調査をしたが、詐偽を事とする會社は次第に滅亡して、痕形も無くなるに反し、幾多の不便と困難とに耐へ正直を旨として、其方針を改めなんだ商店は皆永續繁榮して居る事實を發見したと言ふて居る。

世には本當の悪人といふ者は其れ程、澤山にあるのでは無い。多くは詐偽瞞着の悪いことも、亦之が眞の成功を齎す道で無いことも十分に知つて居り乍ら、實

正 直 は 最 後 の 時 刻

業界全體がさうであるから、自分一人が何れ程、氣張つて見た所で仕方が無い、郷に入つては郷に従がへである。他が皆善くなれば自分は固より正直に遣るといふて姑く悪者の仲間入りをするのが多いのである。斯の如き人は或る意味に於ける伶俐漢ではあらうが、實に薄志弱行の徒であると言はねばならぬ。斯ることを言ふて居つては、所謂千年河清を待つゝの類であつて何時まで経つても、到底實業界の廓清せらるゝ期は無いと思ふ。苟も志ある者は先づ自から奮ふて魏より始めねばならぬ。ソクラテースも人を動さんと欲する者は先づ自ら動けと言ふて居るでは無いか。兎角我々は世の中に惡の蔓つて居るのを見て、正義の力を弱いと思ふが、正義の力は決して其れ程弱いものではない。正義は芥種の如きものである。人これを畑に播けば、よろづの種よりは小さけれども長ちては天空の鳥來りて其枝に宿るほどの樹となる。正義は麩種の如きものである。婦これをとり三斗の粉の中に藏せば悉く脹發するのである。奮約全書にある次の話はよく此眞理を闡明し

て居ると思ふ。

エホバ又言給ふソドムとゴモラの號呼大なるに因り、又其罪甚だ重きに因て我今下りては其號呼の我に達れる如く、かれら全く行ひたりしやを見んとす、若し然らずば我知るに至らんと、其人々其處より身を旋してソドムに赴むけり、アブラハムは尙ほエホバのまへに立てり、アブラハム近よりて言ひけるは爾は義者をも悪者と俱に滅たまふや、若し邑の中に五十人の義者あるも、汝尙ほ其處を滅し其中の五十人の義者のために、これを怒したまはざるや、なんぢ斯の如く爲して義者を悪者と俱に殺すが如きは、是れあるまじき事なり、又義者と悪者を均等するが如きもあるまじき事なり、天下を鞠く者は公義を行ふべきにあらずや、エホバ言ひたまひけるは我若しソドムに於て、邑の中に五十人の義者を看ば其人々々のために其處を盡く怒るさん、アブラハム應へていひけるは我は塵と灰なれども、敢て我主に言上す、若し五十人の義者の中五人缺けたら

んに爾五人の缺たるために邑を盡く滅したまふや、エホバ言ひたまひけるは、若し彼處に四十五人を看ば滅さるべし、アブラハム又重ねてエホバに言上して曰ひけるは、若し彼處に四十人看えなば如何、エホバ言ひたまふ我四十人のために之をなさじ、アブラハム曰ひけるは、請ふわが主よ怒らずして言はしめたまへ、若し彼處に三十人看えなば如何、エホバいひたまふ我三十人を彼處に看ば之を爲さじ、アブラハム言ふ我あへてわが主に申上す、若し彼處に二十人看えなば如何、エホバ言ひたまふ我二十人のためにほろぼさじ、アブラハム言ふ請ふわが主怒らずして今一度言はしめたまへ、若しかしこに十人看えなば如何、エホバ言ひたまふ我十人のためにほろぼさじ、エホバ、アブラハムと言ふことを終へてゆきたまへり、アブラハムはおのれの所にかへりぬ(創世紀第十八章二二節より三十二節迄)むかしソドムとゴモラの人々が、凡ゆる罪惡を行ふたことは世の諺にまで成つて居る位であつたので終に其罰として天から硫黄の雨が降つて之を焼き盡した。

其の時義人なるアブラハムが神とした問答が即ちこれである。アブラハムがソドムに若し五十人の義者があつたら、如何なさると問ふたのに對して、神は渠等の爲めに免すと答へた。アブラハムは其より段々其數を減らして終には十人にまで至つたが、神は假令十人でも義者があらば、渠等の爲めに罰せぬと言ふた。然るに哀ひ事には其十人さへも無かつたので、終にソドムは天罰を免かるゝこと能はず、天火の爲めに燒盡されて仕舞ふたといふ物語である。是が歴史に在つた事實であるか、又神話的の傳説に過ぎぬか、それは何方であつても我々の話の目的には關係が無い。大切なのは此物語の中に含まれて居る道德の教訓であつて、正義の力が如何に強いものであるかといふことを人に教へて居る點である。即ち僅に十人の義者の力で罪惡の貫盈せる極惡無道のソドムの全市が救はれ得るといふことである。

今日の實業界が一般に腐敗して居るから、自分一人が如何に正直にしても畢竟

椽の下の方持で、何の役にも立つもので無いと思ふて居る人はよく此物語を読み此眞理を弄味して大に元氣を出すことが必要である。孔子も徳孤ならず必ず隣ありと言ふて居る。斯の如く正義の爲めに奮闘努力することは、第一には社會國家の利益の爲め、第二には實業全體の地位を高める爲め、第三には自己の信用を厚ふして、つまり、商賣の繁昌を來すの効果あると共に、是れ即ち人間の本分を果し自己の人格を修成練磨するの道であると思へば、如何に其が不便であり困難であつても志ある者は喜んで爲さねばならぬ事であると思ふのである。

三井でも鴻ノ池でも住友でも、所謂老舗として長く續いて居るものを見れば、何れも皆多くの誘惑に勝ち困難に耐へ、正直と信用とを以て築きあげたもので無いのは無い。

實業家たる者は前、に述べたるが如き確信を以て進まねばならぬと同時に、十分に智慧を用ふることが大切である。此點に於て余は今日の實業家に向つて大に注意を促さねばならぬ。渠等は決して其智慧を用ひぬのでは無い、否或る意味に於ては餘りに用ひ過ぎて居ると言ふても善い位である。唯だ用ふべからざる所に用ひ肝心の用ひねばならぬ所に用ひぬのが残念である。是れと言ふのも畢竟渠等が自己の業務に對して、眞の理解を爲して居らぬから起る間違であると思ふ。實業家の本務はこれに依て自己一身の爲めに金を儲けるのであると共に亦た社會の爲めにも利益することを眼目とせねばならぬことは、言ふまでも無いのである。若し實業的活動が單に自己一身の金儲の外に何等の目的なきものならば、社會は實業家に向て何の期待をも爲さざる代り、何等の保護と便利とを渠等に與ふる筈も無いのである。されば彼等は飽く迄其の智慧を絞つて自己の爲めに金を儲けると共に亦た社會の爲めに利益を計ることをも努めねばならぬ。然るに此點

に於て渠等は果して其責任を盡して居るであらうか。余は遺憾ながら直に肯定的の答を爲すことが出来ぬ。

近い例に就て言へば、歐洲大戰の勃發以來、我國の實業家が此好機に乗じて多くの金を儲け、中には一攫數百萬、數千萬の暴富を成した人も尠く無いのを見れば、決して渠等に智慧が無いとは言はれぬ。或る批評家は此等所謂世の成金に對して、渠等は決して自ら其力に依て儲けたのでは無い、全く時勢が渠等に儲けさせて呉れたのであると言ふけれども、世には其目の前に落ちて居る寶をも見落して拾ひ得ぬ人もあり勝ちである。否自分の持つて居る金さへ無くする者の尠く無いのに、如何に僥倖であつたとは言へ、兎に角其機會を逸せずして、巨利を博した人に對しては、渠等是一種の智慧の所有者であるとして、尊敬を拂はねばならぬと思ふ。然し斯の如き人々が自己一個の利益を收むる爲には爾く機敏であるに拘はらず、渠等が社會の利益に對して如何であるかと言ふと、實に無智と言はふか、冷

澹と言はふか、將た不深切と言ふか、殆ど評するに言葉が無いのである。今日諸物價の騰貴其極に達して國民一般が其生活を脅威されて居る事は殆ど前代未曾有の事であつて誰一人憂懼せざる者は無く只管其の救済に心を碎ひて居るのである。然るに肝心なる渠等實業家の之れに對する態度如何を見ると、毫も關心する所なきものゝ如く、否却て此國民一般の不安に乗じて奇利を博せんと鶴の目鷹の目只其機會を窺ふことに腐心せざるは無い有様である。此諸物價の騰貴は世界を通じての現象であつて、獨り我國に限つた事で無く、且かも之には種々紛糾錯綜せる多くの原因があつて起つたので、此大勢は人力を以て如何ともすること能はずと言はゞいふものゝ、其局に當る實業家の心得如何によつては、幾分之を調節し緩和する道が無いとは思はれぬのである。我國民の生活に最も深大の關係ある米の價の如きは、其昂低の原因最も複雑を極むるものであつて、誰にも善く解からぬ程である。或は政府の政策が肯綮に當らぬのも原因であらう、或は農家の賣惜

も原因であらう。其他種々様々なる遠因もあり近因もあつて、斯の如くに米價の狂騰を來したのであるが、兎に角供給の不足が其最大原因を爲して居ることは誰も皆認めて居る所である。されど當業者の買煽や買占や其他殆ど到らざる處なき不正行爲が大に此勢を助長して居ることは否定することの出来ない事實である。されば彼等の良心が今少し鋭敏に働き、今少し悪辣な行爲を慎んだならば、自然の騰貴は斯くまで激甚では無いかも知れぬと思ふ。況んや渠等に國家の安寧と同胞の利益とを思ふ一片の誠意があつて、豫て其實験によつて得た智識を其救済の爲めに用ふるならば、假令全く大勢を沮止し、若くは轉回するの力は無いにしても幾許かの緩和は出来ることと信するのである。然し米の事は姑く置くとしても彼の一時不自然なる相場の暴騰を爲して人を驚かした砂糖の如きは決して實際品物の不足なりしが爲めに斯る現象を見たるにあらずして、全く當業者の買占や、トストラト的行爲が其原因であつたといふことは、一般に信せられて居る事

實である。今日の商賣人に向て斯る事を望むのは迂遠の最も甚いものであると言ふ人もあるであらう。或は實際無理な注文であるかも知れぬ。然し渠等は義理も知り人情も解かる人間である以上、若し實業家として自己の道德的責任如何を解得したらんには、決して同胞の頸を締めてまで獨り暴利を貪らんとする如き不人情な事を敢てすることは無からうと信じて居る。畢竟渠等の頭にまだ商賣は商賣で、道德や人情は商賣には全く關係が無いといふ考が深く染込んで居つて、容易に脱けないからであると思ふ。渠等がまだ實業家の尊き天職を十分に自覺せざるが爲めに、社會公衆の利益の爲めに奮勵努力せんと欲する高尚なる志が無いからであると思ふ。

今日の産業組織は複雑でもあり、且つ其範圍も廣大であるから、固より同日に論ずることは出来ぬけれども、かの前に言ふた江戸の大火の最中に逸早く木曾に赴き盡く山の材木を買占めて、自ら巨利を博し、兼ねて百萬の市民に災後家屋の

不自由無からしめたる紀の國屋文左衛門の機智と膽力と義侠心とを有する實業家が今日世に在つたならば、恐く物價の調節も幾許か出来て居るであらうと思ふ。文左衛門が商業に就て如何なる考を抱て居つたか、其動機が果して我々の思ふが如き高尚なるものであつたか如何かは、固より知るべき由なけれど、其結果によつて見ると滔々たる今日の實業家が物價の騰昂するのを見れば益々之をせり上げ買煽り社會公衆を塗炭の苦みに陥れて、恬として顧みざるのみならず、却て得意揚々たるが如き者に比ぶれば、實に雲泥月鼈の差があると言はねばならぬ。若し文左衛門を地下に呼起して、今日の有様を見せたならば彼は果して何と言ふであらうか。彼は實業萬能の世界に生れ實業の旺盛の盛時に遭遇して居る今日の實業家の實に腐甲斐なきを、さぞ嗤笑することであらうと思ふ。

然し乍ら余は前にも言ふた通り今日我國の實業家は決して利己一遍、義理人情を辨へざる強慾非道の人では無いと思ふ。渠等には血もあり涙もあることは昨年

米價の騰貴して細民の窮迫甚しかりしを見れば、渠等は陸續其救済の爲めに巨額の寄附を爲したるが如き、以て之を知るに足るべきである。中には暴利取締令に觸れて處罰を受けたる人までが、其寄附者の一人たりしと云ふが如きは、聊か滑稽であり皮肉であると言へば言へ、亦以て人性の善なる、如何なる人も羞惡の心も惻隱の心もあるといふことを證するに足るものであるとも思はれるのである。此等は先づ別としても近來世の富豪中、種々なる社會事業、慈善事業の爲めに尠からざる寄附を爲す者の起つたことは、實に感服の至りである。されば余は之に對して敬意と感謝とを拂ふことに敢て吝ならざれど、此等は富豪が富豪たるの義務を盡すのであつて、敢て實業家が其實業的行爲に於て道德上の責務を遂げたものとは認むることが出来ぬ。何となれば此等所謂慈善家が其本職たる實業上の行爲を見ると如何にも感心の出來ざる事が多いからである。

一方に於ては惜し氣もなく、巨萬の金を社會事業や慈善事業の爲めに出す人

が、他の一方に於ては、地代や家賃の無法なる引揚をして、貧民の血を絞取ることを何とも思ふて居らぬと言ふが如きは其一例である。渠等は取る時には取れ遣る時には遣ると云ふ實業上の主義を誤用し濫用して、取るべからざるものまでも取るに躊躇せぬのである。是れ畢竟渠等が其實業的行爲を重大視せぬから起るのであると言はねばならぬ。我々は固より成功したる商工業家に向ては其成功に對する責任をも要求するのであるが、其れと同時に商工業家が其商工業家として平常行ふ所の行爲に就て十分に其義務を全ふせられんことを望まざるを得ないのである。我々は實業の向上發展は實業家自らの自重心に俟たねばならぬことを確信して居る。

昨年以來の米價の騰貴に就ては政府の最初の處置が氣に入らぬとして、當業者が反抗的に意地悪く行動したことも、其の一原因であるといふことを言ふ者もあるが、若し果して之が事實であるならば、吾人は當業者の考が甚だ間違つて居るの

を責めねばならぬ。米價が法外の狂騰を爲して民衆の生活が脅威せらるゝことがあらば、政府は政府として適當の處置を執るべきは固より論の無い事であるが當業者の目から見れば、役人は寧ろ素人である、其道にかけて専門的智識を有する者は己れに優さつた者は無いのである。されば當業者にして苟も自任自負の心があらば、政府の干渉を俟つまでも無く先づ自ら進んで、之が解決の任に當らねばならぬ筈である。斯くしてこそ自己の手腕も顯はれ、實業の價値も世に認めらるゝ譯である。之が爲めに苦辛慘憺智慧を盡し精神を盡し、奮闘努力してこそ實業家の本分が立つのではあるまいか。然るに政府の處置が癪に障るとか、氣に入らぬとかいふが如きことを托辭として、其腹癒せに愈々市場を攪動し益々米價を釣揚げて、以て社會公衆を不幸に陥らしむるといふ如きあらば、實に言語道斷沙汰の限であると言はねばならぬ。渠等が斯の如き行爲は獨り社會公衆を不幸に陥らしむるに止まらず、實に彼等自らの人格を損し實業の價値を墮落せしむるの甚し

きものである。吾人は此點に就て大に我實業家其人の反省を促さんと欲するのである。

三十四 實業家は金を儲けることを知つて使ふ道を知らず

西洋の諺にも金銭は之を使ふと忠義なる奴僕であるが、使はれると暴逆なる君主であると言ふが、商工業家は特に金銭に關係の深い職柄であるから、常に金銭を使ふて之に使はれざる覺悟が肝要である。商工業家の尊ばるゝのも金銭であれば、其賤まるゝのも亦た金銭である。彼等は金銭によつて世界を利益すれば、亦た金銭によつて社會に害毒を流すのである。金銭は人を活し亦た人を殺し、金銭は人を高尚ならしめ亦卑屈ならしむるものである。昭憲皇太后の御歌のにも、

もつ人の心によりて瓦とも玉ともなるは黄金なりけり

とあるが、之を瓦にせず玉にするのが、洵に大切なる點であつて、其人の人格

如何によつて同じ金銭が或は玉ともなり、又瓦ともなるのである。而して之を玉にして燦爛たる光輝を放たしむるのが、特に實業家の本務である。ミーダスの様に鍊金師の様に其觸るゝ所の凡ての物を化して黄金となし、而かも之を世の中の爲めに最も利益のある様に使ふのが有爲なる實業家の手腕である。カーネギー翁も各自が相當の生活を爲すに必要なだけのものを差引いた残りの財産は凡て皆社會の利益の爲めに使ふべく與へられたる天の信託であると言ふて居るが、前に擧げた譬喩に在る銀五千と二千とを受けたる勤勉なる僕は、孰れも信託を全ふして其金銭を玉にした者、之に反して銀一千を受けた怠惰なる僕は之を徒ふして瓦にした者であるといふべきである。カーネギー翁の如きは無一物から世界の富豪となり、儲けることも儲けたが、其儲けた金を散することは更に顯著なるものがあつた。翁は平生「下爲三子孫一買中美田上」の主義を持し、其儲けて得た金は己が生きて居る間に、自ら世界人類の爲めに最も有利有益なりと信ずる事に使ふ

ことを以て理想とし、只管之に焦慮して居つたのである。翁が平和の爲に、圖書館の爲めに、其他種々なる公利公益の爲めに是まで投じた金は實に驚くべき巨額に達して居る。

過般翁の此世を去りたる時、新聞紙の傳ふる所に據ると、翁が斯の如く公利公益の爲めに出した金は無慮三億三千万弗に及んで居るが、其遺産として遺したものは僅か三千万弗に過ぎぬといふことである。翁が平生斯る心掛けで居つたからこそ、一生涯中に斯る大金儲けも出来たものであると思ふ。ロツクフェラー氏も其富を爲すに至つた徑路に就ては、大に非難を免れぬけれども、彼がその得たる財を散すること就ては、世の富豪の大に學ばねばならぬ事がある。シカゴ大學やロツクフェラー研究所は永く、氏が人類の爲めに盡した功績を語る記念碑である。又近ごろ新聞紙の傳ふる所によると、かの自働車王として有名なヘンリー、フォード氏は今回氏の工場で戦時中獲た利益（軍需品及び自働車の請負で）の五割八分

を政府に返還する爲め其の利益計算方を大藏省に申出たので、大藏卿は收税官ロ
ーバー氏に之れが検査計算を命じた、其利益金は約千八百萬圓に達すべく残りの
利益金の大部分は工場員の積立金に充當する旨を発表したとのことである。フォ
ド氏の平和論には反對があつても、此利益金の處分には感心せざる者はあるまい
と思ふ。少し異様には聽えるが、實際金を使ふことは金を儲けることよりも一層
六ヶ敷いのである。運や僥倖で儲けることはあつても、人格が無くては正當に使
ふことは出来ぬ。其金の使ひ方によつて其人の人格は直に解かるのである。

此度の戦争に大なる成功を成した我國の商工業者は僥倖にも時勢の恩恵で儲け
さして貰つたのか、或は自分の智慧、自己の手腕に依て本當に儲けたのであるか、
これは敢て深く穿鑿する必要も無からう。兎に角儲けたことは儲けたのに相違が
ないのであるから、我等は其人の爲め又國家の爲めに大に之を祝することを辭せ
ぬのである。然し乍ら彼等が其金を使ふ使ひ方を見ては實に遺憾に堪へざること

が甚だ多い。吾人は只だ彼等の爲めに惜むのみならず、亦た社會の風教惹いては
國家の前途の爲めに寒心せざるを得ぬものがある。試に兩三年前所謂成金全盛の
時代を回顧して見れば思半に過るものがある。當時彼等が得意極まつて鼻息の
荒かつたことはどうであつたか。彼等は忽ち世界の大富豪に成つた積であつた。
餘りに儲つて使う道の無いのに困るといふ素振を示した。否斯る事を人に向て公
言することすら憚らなんだ。其傍若無人の狂態は心ある人をして、竊に鑿聲せし
めたのである。一夕の宴に萬金を費し、一幅の書畫若くは一片の骨董に十萬、或
は百萬を擲つ如きは言はずもがな、只だ華美を競ひ豪奢を誇り、傲慢無禮飽くま
で野卑醜劣なる成上り根生を發揮し、可惜金錢を湯水の如くに使ふことを以て
能事と爲し、爲めに世人の憎悪と嘲笑とを招きたるは、實に淺猿しい極みであつ
た。

然れども楹花一朝の榮、傲る平家は久しからず、歐洲の戦争も終を告げ、世界の